

ONE PIECE-彼を王に-

完全怠惰宣言

エースを王に。

それだけの願いで書き出した2作目。

既にスピード海賊団クルーは設定が出てしまっているので全く別の海賊団をエースと共に結成してもらいます。

# 目次

Rを継ぐ者／その男、風使い	1
Aの男二人のコウカイ	15
Cの快盗／嘘はドロボウと女の子の特権	25
Cの快盗／彼女は如何にしてその道を選んだのか	35
Cの快盗／激情と兆し	43
Cの快盗／故に彼は風と共にある	55
Cの快盗／その心に灯る焰	65
Cの快盗 We Are	75
Dに集え／其々の今	87
Dに集え／風迅と海賊処刑人	95
Dに集え／その為の重要な寄り道	107

D に集え／衝撃の出会い

D に集え／其々の事情

D に集え／そして結ばれる手

その果てに掴み取れ

その果てにつかみ取れ／現れる T

その果てにつかみ取れ／ R であること

その果てにつかみ取れ／ L があるということ

## Rを継ぐ者／その男、風使い

STAMPEDEをやつと見れた勢いと、エースを王にしたいという欲望をエネルギーに描いた作品です。

こちらでは他作品のキャラクターは出さずに、なおかつ時系列的に仲間につきそつうな奴らを引っ張り込んでいく所存です。

よろしくお願いします。

---

オレの名はフェンシルバード・レイズ。

ある日気が付くとオレはキャンピングカーのような船の上にいる。

そして、激しい頭痛に襲われ“この世界”と自分という存在を正確に認識することになった。

オレの素性は「海賊王の右腕」と呼ばれた「冥王」シルバース・レイリーを大祖父に持つ賞金稼ぎだ。

そして、俗にいう“転生”し“渡界”した存在でもある。

転生したからと言ってルフィの仲間になろうとは思わなかった。

絶対に苦勞するから。

じゃあ、ナミたちを助けようとしたのか。

気が付いたら既に18歳だったから無理だ。

かといって海軍に入ろうとは思わなかった。

上下関係と世界貴族の相手が嫌だった。

そうして、この世界に来て5年。気が付いたら異名持ちの賞金稼ぎとなっていた。

“風迅ふうじんのレイズ”

東の海イーストブルーにおいて、この名を知らぬ者はいないとされるほどに有名になったオレを倒して名を上げようとする小物海賊を捕縛しては海軍に引き渡し、中級海賊団を潰しては海軍に引き渡し、そんな生活を繰り返していたある日だった。

時は昼時。

前世今世において一人暮らしが長かったせい料理は得意な料理男子なオレはつ

い先日、顔馴染みとなった“煙中佐”から懸賞金をもらい、その足で買った「霜降りマグロ」で優雅に昼飯をしようと刺身にして飯の準備をしていた。

前世が日本人なためか、米が好きなおれは味噌汁も作り、冷蔵庫に作り置きしていた沢庵を切り出し、朝に釣った白身の魚も添えて豪勢な昼飯を始めようとしたその時だった。

ふと視線を上にあげると口から唾液を滝のように流した青年がこちらを見ていたのであった。

ずぶ濡れな上に腹から獣の唸り声のような音を響かせる青年を見て思わず聞いてしまった。

「一緒に食べます？」

EEEEEEEEEEEE<sup>3</sup>

「ふいふ、食った食った」

刺身定食もどきだけでなく冷蔵庫の中身も粗方食い漁った青年は笑顔を浮かべて

船内に置いてあるソファ―に寝そべっていた。

「そりゃ、人様の 1 週間分の食料食い漁れば満足するだろうよ」

そう、食後のお茶を飲みながら目の前の馬鹿に視線を送る。

「いや、すまない。乗ってた船が転覆しちゃってよ。なんとか泳いでこの島まで来たのはいいが財布まで流されちゃったよう」

“ オレンジのテングロンハット ” を被りなおした青年は身なりを整えると改めてオレに向かい合った。

「いやいや、食後のお茶まで申し訳ない。それにしてもいい船だな、あんたどこかの金持ちか」

「だあほ、賞金稼ぎだよ。そろそろ、身の振り方を考えようとしてる最中のな」

「賞金稼ぎ” か」

「ああ、父親は元々知らねえし、母親はオレを生んで病死した。つい最近まで婆ちゃんが育ててくれたけど婆ちゃんもこの間旅立っちゃった。

この船は、婆ちゃんの遺産だ」

そう言って、本を取り出し茶をすするオレをどこか同類を見るような目で見てく



る青年。

「悪かったな、言いたくないこと言わせて」

そう言ってテンガロンハットを顔を隠すように傾ける青年。

先ほどから目の前の青年をどこかで見たことがあるようなそんな気がしてならぬのだが。

そこからはばらく互いにお茶を啜る音と波の音以外は消えていた。

EEEEEEEEEEEE

目の前の男を注意深く観察する。

出生が出生なだけに“他人”を観察する“癖”が出来ちまったオレは飯を“奢ってくれた”目の前の男を注意深く観察している。

白銀を思わせる肩まで伸ばした髪。

猛禽類を連想させる青い瞳。

寧猛に思われる外見とは裏腹に、会って間もない自分に飯を“奢ってくれる”人

情味を持っている。

そんな男の家族関係を図らずも知ってしまった、気まずい空気の中茶を啜っている。すると、外から怒鳴り声が聞こえてきた。

『おい、風迅、出てきやがれ』

海に出たばかりのオレに異名があるわけがなく、おそらく目の前で本を読みながら茶を啜っている男性のことだろうと辺りを付けた。

「おい、呼ばれてるぜ」

一応声をかけてみたが、目の前の男は読んでいた本からオレに視線をずらした後、また本に視線を戻してしまった。

「あと2ページ読んだらキリが良いとこまで行くから、そしたら相手してやるよ」  
そう言ってまた本を読み始める男。

興味本位で窓から外をのぞくと、船の周りをぐるりと「いかにも」な男共が取り囲んでいた。

よく見ると誰しもが傷の手当てがなされており、明らかに手負いの様相だった。「なあ、もし良かったらオレが相手してこようか？」

そう、提案すると男は今度は視線を動かさずに答えてきた。

「ま、そうだな。食い荒らした食料分は働いてもらうか」

おいおい、奢りじゃなかったのかよ。

「それじゃ小僧。できる範囲でいいからな。ま、せめて“2分”は持たせてくれよ」

そう言うのと今度こそ読書に意識を戻した目の前の男。

今のオレの“実力”がどの程度通じるのか。

オレがこの先の海で成り上がれるのか。

「その喧嘩、オレが買った」

こいつらには悪いがオレのちきん石になってもらおうじゃないか。

EEEEEEEEEE

扉を勢いよく出ていく青年を見送りながら、実のところオレは顔がにやけそうになるのを必死にこらえていた。

「(おいおいおいおいおいおい、”エース”だよエース。オレが知ってる

エースより若いし、泳げたってことはまだ海に出たばかりなのか」

読書もそこそこに窓からエースの戦いを見る。

何処に置いてあったのか鉄パイプを片手に、雑魚はお呼びじゃねえとばかりに海賊無双しているエース。

体裁きが無駄が多いが後々のことを考えると十分な仕上がりののではないかと思える。

そこいらのチンピラ相手だったら問題なく戦っていけるだろう。

「(でも、そいつらを甘く見てるとヤバイんだよな)」

なんせ、そいつらイーストブル東の海では珍しい、能力者がいる海賊団だったからな。

EEEEEEEEEE

雑魚は粗方片付け終えたオレは頭目である男と対峙していた。

「さて、あとはお前さんだけだな。降参するなら今のうちだぜ」

今のオレの実力は大体図れた。

これ以上の戦闘は意味がないと促すと目の前の男は体をブルブルと振るわせ始めた。

「ちょっとあんた、あんまりアテクシのことお舐めになるんじゃないわよ」

いかつい図体に野太い声、いかにもな強面がオカマだった事実にし少し吹き出してしまった。

「いいこと、坊や。あんたがぶっ飛ばしたのはうちの海賊団でも雑魚よ。本命はアテクシ、アテクシが相手してあげるわ」

そう言うのと猛然と突っ込んでくるオカマにオレはタイミングを合わせて鉄パイプを振り落とした次の瞬間。

ガキンという金属が互いにぶつかったようなような音をして鉄パイプが弾かれた。

「んおっほっほほほほほほほ、アテクシは『ゴチゴチの実』を食べた『全身硬化人間』如何なる者もアテクシを傷つけることは出来なくてよ」

そう、勝利宣言をするかのようにオレを指差してくるオカマ野郎。

そこからは形勢逆転とばかりにオレが攻められ始めた。

能力者の土壤で戦うことの難しさはルフィで痛感していたが、こいつはルフィ以上に能力を熟知していやがる。

周りで倒れていた雑魚共も息を吹き替えてオカマを応援してやがる。

時折、オレの足を引っ掻けたり、槍をつき出したりと邪魔してきやがる。

そして、ついにオレのスタミナが切れて足がもたついちまった。

その隙をオカマが見逃す筈がなくオレは恩人の船へと投げつけられた。

「んおっほっほほほほほほほ、雑魚はお呼びでなくてよ。あんたたち、その目障りなゴミを片付けちゃあなさい」

オカマの声が響くのと同時に周りの奴等が一斉に撃ってきやがった。

オレはこんなところで死んじまうのか。まだ「サボ」との約束も果たしてないのに。

「ジャスト3分、それが今のお前の実力か」

いつの間にか瞋っちまっていた目を開けるとそこには、扇を片手に優雅に立つ恩人がいた。

EEEEEEEEEEEE

オレは、既にキリのいいところまで読み終えていた本を机に置いて窓から戦闘を覗いていた。

オレの知る“エース”は“能力”を主軸にした肉弾戦を得意としている。

でもそれは“能力者”になった後に構築したスタイルだったんだろう。

“今”のエースは鉄パイプを使用しての棒術擬きで戦っていた。

肉体を瞬間的に自然現象へ変化させられる自然系ロギアの能力を持たないエースは常に周囲に気を配り、自分の死角を作らない見事な戦いぶりだった。

ただ、時折“誰か”に背中を預けていたような仕草が垣間見えたことからエースの中にまだ“サボ”が生きているように思えて少しうれしく思えた。

そして、自分の中にある思いが芽生えていた。

“エースを“王”にしたい”

原作で涙ながら放たれた彼の心からの感謝の言葉。

そう思わせる世界がこの世界である。

ただ一人の青年にこのように思わせる世界なのだと。

そして、そんな青年を“王”にしてやりたい。

不特定多数から愛されなくていい、エースを慕ってくれる誰かに愛されていると  
感じてほしい。

そんな風に思ってしまった。

そう思ったからだからか、気が付くとエースの前に立っていた。

「ジャスト3分、それが今のお前の実力か」

そう言ってしまったが、慣れない能力者相手でも本当にゴロツキ共を相手にした経験がないと考えると十分だった。

「ここからは、オレが相手だ」

扇を広げ風を回す。

「“風迅ふうじんのレイズ”、“エアエアの実”の力を得た大気・気圧操作人間。切り刻まれる覚悟はできているか」

EEEEEEEEEE



恩人、レイズが現れてからの戦闘は一方的だった。

オレが苦戦した能力者も気が付けば気絶していやがった。

その後、海賊団全員を海軍に引き渡しホクホクした顔で戻ってきたレイズを見て、似ても似つかないはずの“相棒”を思い出した。

「なあレイズさん、この後はどうするんだ」

なぜだか、この人はオレを受け入れてくれる気がした。

「そうさな、とりあえず一旦偉大なる航路グランド・ラインに戻って、そこから考えようと思う」

そう言って笑ったその顔は年上のはずなのにルフィを思い出させる無邪気さがあつた。

だから、つい言っちゃまったんだろうな。

「オレの名はポートガス・D・エース。レイズ、オレと一緒に世界を周ろう。この出会いは“運命”だ」

誰も知らない物語。

後に五帝の一人「焰皇えんこう」と呼ばれ、偉大なる航路グランド・ラインに最年少で君臨することになる  
シャツフル海賊団船長”ポートガス・D・エース”。

後に「焰皇の右腕」、「空魔くうま」と呼ばれるシャツフル海賊団副船長”フェンシルバー  
ド・レイズ”。

彼らの出会いはこんなものだった。

---

時系列的に可笑しいだろうとか、なぜサラダ？という内容も今後は出てきます  
がご容認いただきたい。

作者はサラダだとローが好きです。

## Aの男/二人のコウカイ

前話において「五皇」ではなく「五帝」と表記しましたが、敢えてです。記載ミスではありませんのであしからず。

「エースは“悪魔の実”についてどこまで知ってるんだ」

その後、オレの華麗なる交渉術（嘘）により仲間になることを承諾してくれたレイズ。

現状、仲間も船も金も知識も足りてないオレ達が「海賊団」を名乗るのは烏滸がましいとレイズに言われ、最低でも後3人仲間が増えるまでは「海賊団」を名乗らない、「海賊旗を掲げない」の二つを約束させられた。

そんな状況の中、レイズの方が物事を知っているため、オレは毎日“お勉強”させられていた。

「悪魔の実」、ていうと食べば何らかの「特別な力」が手に入るってことと、味が最悪だっただけくらいかな」

そうオレの言葉を聞いたレイズは頭を押さえやがった。

あ、これはマジ勉強パターンだ。

「大体は、大体はその理解で良いけど、今後のことでもあるから少し勉強しようか」

そう言うとマキノさんが本気で怒った時のような笑顔を顔に張り付けたレイズと視線が合った。

「ハイ、オレガンバリマス」

めっちゃ怖かった。

悪魔の実

「海の悪魔の化身」と言われる果实で、いかなる生物が食べても特殊な能力を得られる。

悪魔の実の種類は多岐にわたり、食べた実の種類に応じた能力を得られる。

実を一口でもかじると、その時点で食べた者に能力が発現し、残りの実はただの

マズイ果実となる。

「それじゃよ、1つの実から同じ能力を持つ奴が沢山できるわけじゃないんだな」  
そういうことだ。

一般的に希少と言われている悪魔の実だが、グランド・ライン偉大なる航路にはかなりの数の能力者が存在している。

能力者になることでデメリットもあるが、それにも勝る“強さ”を得ることが出来ることから、グランド・ライン偉大なる航路に能力者が集まってくると言われている。

「能力者のデメリットって海で泳げなくなる“カナヅチ”になることじゃないのか」  
この場合、“海”は「水が溜まっている場所」、更に言うところ“全身”を一定時間濡らせられる場所」と解釈したほうがいい。

流水は特に問題ないが、風呂なんかでも力が入らなくなるからな。

あと、理由は定かではないが二つ以上の能力を得ることができない。

「そういうもんなのか」

そう考えても構わない。

悪魔の実の大分類についてはこの前やったからいいとして、悪魔の実には明確な

能力の上下関係がある事が最近分かった。

「ああ、この前言ってた似たような能力の相互関係性ってやつか」

正解、同種の能力を持つ悪魔の实の間には、明確な上下関係がある場合がある事が最近の研究で判明したんだ。

ただし、能力の強さと能力者の強さが必ずしも一致するわけではないんだ。

ようは使い方だな。

「さて、今日はこれくらいにして、エースは魚釣りな」

「えー、少し休ませろよ」

「冷蔵庫の中身がだいぶ減ってるんだけど、誰かがつまみ食いしたのかな」

「ハイ、行ってきます」

そういって元氣よくエースは釣りに出掛けた。

エースがいなくなり、これからのことを考えた。

航海士としての技能はある事はあるんだが、料理人もやりながら、船医に船大工の真似事も、という状況だと満足に航海がしにくい。

どこかで、せめて航海士だけでも見つけないとな。

EEEEEEEE-

レイズに言われて仕方なく釣りを始める。

ここ最近レイズに言われてきたことだが、この先成り上がて行くためには「頭」  
を使えて、「情報」を常に集め続けられる状況が一番望ましいとも言っていた。

無作為に飛ぶニュースクーから買う新聞じゃ制限された情報しか集まらないと  
言っていたし、どうしたものか。

ない頭で知恵を絞っていると竿に当たりがきた。

竿の撓りから見てかなりの大物だろう。

見てろよレイズ、船長(仮)の底力を見せてやる。

EEEEEEEE-

エースが釣りを始めてそろそろ1時間。

洗い物も終わり、おやつのカッキーを焼いている。

ルフィの義兄だからと侮っていたが、そこそ節制した食事に満足してもらっているのも、手が空いたときはおやつを作ってやるようにしている。

オーブンに形成したクッキーを入れて焼き上がりを待っていると外からエースの悲鳴が聞こえてきた。

また、海王類の稚魚でも釣り上げたのだろうと呑気に甲板に顔を出したのが運のつきだった。

「レ、レ、レ、レ、レイズ。女の子が釣れた」

「何つう物を釣り上げとるんじゃ、このお馬鹿」

「あと息してねえ」

「先にそれを言え、ド阿呆」

救命処置は大切。

みんなも機会があったら覚えようね。

レイズお兄さんとの約束だよ。



EEEEEEEE-

レイズがオレが釣っちまった女の子とキスして胸揉んでから、女の子が息を吹替えした。

キスして乳揉めば女の子は息吹替えすんだなと言ったら、思いっきり殴られた上に、おやつ抜きで救命処置の勉強を正座でさせられた。

理不尽だ。

今は余っていたベッドルームに寝かせているがいつ目を覚ますのかはレイズにも解らないとのことだった。

「ただの『遭難者』では無さそうだな。身体中見える範囲で傷だらけだったし、その傷も鎖を打ち付けられた痕のようにも見えたしな」

「ひでえことしやがるぜ。何かこの子の身の上が解るような物はあったか」

「ダアホ、気絶した女の子をまさぐれるか。「乳は揉んだのにな」

ガス、バキ、ドコ、ドカ、バキ、ドゴス

「それに何か、あの子のことどこかで見たことあるような」

「リエ、リエイジュちゃん。もうひわけありまひえんでひた」

EEEEEEEE-

シリアスな顔をし何かを思い出そうとしているレイズ。

そのレイズにボコボコに殴られ顔を大きく張らしたエースが鎮座する扉の中。  
少女は目を覚ましていた。

「ナミ、無事逃げられたかな」

助けられた少女は誰なのか？

なぜ、ウチのエースは一言多くなってしまおうのか？

救命処置は本当に大切です。

皆さんも機会があったら是非、講習を受けてみてください。昔は免許取る時があったんですが今はどうなんでしょう？



## Cの快盜／嘘はドロボウと女の子の特権

(出来) 上がったら、出す。

そんなスタイルでお送りしておりますが、そろそろ息切れしそう。

“98”。

この数字が何を意味するのか。

答えはレイズの賞金首確保率である。

唐突だが、レイズは“新世界”の出身である。

大叔父の悪評が及ぶ前にと祖母が故郷である東の海へとレイズが物心つくかつ

イースト・ブルー

かないかの年齢の時に連れ出してくれたため、本人もぼんやりとしか覚えていないのが実状であるが。

そんなレイズは幼少期に“母から受け継いだ”悪魔の実の力が発現し、突如とし

て様々な声が異常なまでに聞こえてしまう時期があった。

レイズ本人は未だに“能力の暴走”と考えているが、実際は“覇氣”と呼ばれる力の一端が同時に覚醒してしまったことによる弊害であった。

祖母はこの異常な孫の将来を懸念してか、レイズが幼い頃から某中将与同等の訓練をしてきた。

おかげで、現在のレイズは“能力”と“覇氣”を行使して周囲の状況を音で聴き、脳内で映像化するまでに至っている。

そんな、レイズだからこそ視覚を塞がれたとしても、“音”を感知して対象を捕捉してしまうのであった。

エースに説明した際には“恐ろしい地獄耳”という認識で終わったが、強ち間違っていないと思ってしまったのは言うまでもない。

なお、レイズは未だに“覇氣”の概要を知らないという事実を記しておこう。

もう一つ、レイズは“原作知識を有する転生者”ではあるのだが、その知識には“穴”があるのである。

こんなキャラクターいたな、“悪魔の実”に関する知識、この世界の刀剣類に関

する知識、ストリーリーに関わることは大抵思い出せるのだが、細かい内容については「インクで塗り潰されている」ような感覚で思い出そうとしてもはつきりと思いつけない状況にある。

しかし、知識を得ることでその「インクで塗り潰されているような箇所」が思い出されることに気が付いて以降、レイズは「情報」を得る重要性に重きを置いて、賞金稼ぎ業に勤しんでいた。

—————

「助けていただきありがとうございます、私は「カトリーナ」と申します」  
エースに釣り上げられた少女が部屋から出てきたのは、翌日の朝方になってからだった。

「カトリーナ」を名乗る少女は現在、身体が一回り大きく、裾の長い服を好むレイズの服を借りていた。

身体中の治療に關しても了承を得た後に確りと成されていた。

「おう、オレはエース。このかい……わいで旅をし始めた者だ。この船の船長もやっている」

人好きする笑みを浮かべながら挨拶を返すエース。

途中でレイズとの約束を思い出し、『海賊』と名のりそうになったが、何とか誤魔化した。

決して対面にいるレイズに睨まれたからではない。

「そっちで料理しているのは、相棒のレイズ」

エースに紹介され、軽く会釈をするレイズ。

お昼に近いというのもあってか、ダイニングに隣接する対面キッチンからだが、顔をしっかりと出しての会釈だった。

「改めまして、助けていただいたいて本当にありがとうございます」

「あんた、傷だらけだったけど襲われでもしたのか」

エースの質問に突如として青ざめたカトリーナ。

震える身体を自分を守るように抱きしめた。

「あの、その事については……」



「あ、イヤなオレ達も無理矢理聞こうって訳じゃなくてな。あのよ、そのな……」  
カトリーナの態度に思わず狼狽えてしまふエース。

確かに見目可愛らしい少女が明らかに訳有りな状態で発見されたなら事情を聞くとうとするのは当たり前である。

如何に此処が「東の海」イースト・ブルーと言っても大海賊時代真つ只中の今、どういった危険が待っているのか知れたものではないからだ。

「ま、事情は追々にして、エース取り敢えず飯にするか」  
湿っぽい空気を打ち消すようにレイズが出来上がったばかりの昼食をダイニングテーブルにおいた。

大皿にはたくさんの肉団子とトマトソースがからめられた特盛のスパゲティーが置かれていた。

「男料理で悪いがカトリーナもまずは食べな」

「そうそう、腹が減ってたら悪いことばっか考えちまうからな」

そう、にこやかに話しかけてくるレイズと既にいただきますしているエースの姿が面白かったのか、カトリーナの顔も笑顔になっていた。

「それでは、お言葉に甘えまして」

「おう、レイズの飯は美味えぞ」

「サラダも食えよエース」

三人の昼食は穏やかに進むのであった。

—————

レイズと航海をするようになってエースには日課と言うものが出来た。

まずは、「早寝早起き」である。

異世界の知識を持つレイズはエースを王にするために、エースを鍛え直すことにした。

その為、成長ホルモンが分泌される黄金時間に睡眠を取れるように夕食の時間を調整して早寝させるようにした。

そして、部屋を別々にしたのを利用して早朝に釣りをさせるようにし、早起きの習慣を身に付けさせたのである。

次に、エースの身体の使い方を矯正し始めたのであった。

祖母直伝のこの特訓、簡単に言ってしまうと自分の身体がどのように動いているのかを把握させることで、攻撃に移る際の体重移動や、攻撃を繰り出す最高のタイミングを掴ませることで、どうなるか解らない未来に置いてエースの基礎能力を上げる目的があったのである。

その中には太極拳擬きの動きもあり、地味にエースの戦闘技能向上に役立っていたのである。

そして、最後が短時間睡眠つまりお昼寝であった。

昼前に行く身体の動作確認はエースが思っていた以上に体力を消耗させてしまう。

そのため、午後からも元気に動くために昼寝をするようになったのである。

ちなみに、最初期はご飯食べながら寝るという一コマもありレイズは地味に原作的な行動に喜んでいた。

「エースさんってこうして寝顔を拝見していますと本当に子供みたいですね」

一応の部外者がいるにも関わらずソファで爆睡しているエースを見てカトリーナ

の感想がそれであった。

「食って、寝て、遊んで。こう見ると確かに子供だな」

昼食の後片付けで皿を拭きながらレイズの同意を得てつついっくスリと笑ってしまふカトリーナ。

「レイズさん、この後はどうかされるんですか？」

「今日は無風状態だし、オールでっていう気分でもないからな。部屋で本を読んでいるよ」

「それでしたら、私もお借りしているお部屋に戻らせていただきます」  
そう言ってダイニングを後にするカトリーナ。

「“彼女”のことは任せてもらうぞエース」

「おう、レイズなら悪いことにならないだろうからな」  
レイズの手の中にはキツネを模した一对のイヤリングが握られていた。

—————

「あれ、可笑しいな”あんな物”外れるはずなのに」  
部屋の中を探し回っているカトリーナ。

先ほどまでの怯えていた様子もなく、かといって奥ゆかしさも見当たらない元気な少女の姿がそこにはあった。

「にしても、このご時世に呑気にクルージングって訳でもなさそうね」

搜索を一区切りつけて自分の借りている部屋を見渡すカトリーナ。

調度品もけして安いというわけでもなく、かといって馬鹿みたいに高いというわけでもない。

「エースっていう金持ちの放蕩息子に付き合わされている執事のレイズ．．．．でもなさそうだしな」

先ほどのやり取りと生来の自分の他人の気配に対する鋭さから周りに誰もいないことを確信して素に戻ってしまったている。

「救助ボートで逃げ出そうにもな．．．．はい、考えタイム終了。探し物続きしな」と

いつもの彼女なら気が付くはずだった自分が背を向けたドアが開いていたことに。

そして、そこに人が立っていたことに。

「探し物はこれかな”カリーナ”」

そう、後ろからイヤリングを目の前に垂らされ、思わず安堵したような雰囲気を出すカトリーナ”だった”少女。

「あら、ご親切にありが．．．と．．．う？」

さび付いたブリキのおもちゃのように後ろを振り向くと入り口にはダイニングにいるはずのレイズが開けられたドアに背を預けながら立っていた。

「あの、レイズさん私は”女狐”カリーナ、海賊や無法者を相手取る盗賊のお前がなんて漂流してたんだ」

「．．．．．なんだ、バレてたのか。ウシシシシシシシシシ」

カリーナは悪戯がばれた子供のような顔をして笑ったのだった。

---

個人的な話ですが01のイズちゃんめっさ可愛い件について東映さんありがとう。

## Cの快盗／彼女は如何にしてその道を選んだのか

暗いよ、辛いよ。

捏造だけどさ、辛いよ。

“女狐カリーナ”

アウトローをターゲットにする新進気鋭の女盗賊。

弱冠13歳ながら盗んだお宝は数知れず、あまりに鮮やかな手口は古参の泥棒達からも称賛されるほどであった。

そんな、彼女は如何にして“盗賊”という道を選んだのだろうか。

意外かもしれないが、カリーナは“新世界”で育った、幼少期まで何処にでもいそうな少しお転婆が過ぎる女の子だった。

彼女が、10歳になったとき人生が大きく変わった。

カリーナはその日、家族と共にシャボンディ諸島を訪れていた。

そこで、彼女は“とある存在”と出会ってしまった。

世界貴族 “天竜人”

カリーナは“誰か”に押し出され、天竜人の歩く前に飛び出してしまった。

不敬を咎められたカリーナはその場で奴隷にされてしまった。

両親に助けを求め、辺りを見回すと自分の知らない誰かから多額のベリーを受けとる両親の姿があった。

彼らは、カリーナに目もくれることなくその場を後にした。

天竜人は余興だといってヒューマンショップにカリーナを売り払い、なにもせずに戻っていった。

ある意味、カリーナは幸運だったかもしれない。

彼女には竜の爪痕が残ることはなかったのだから。

檻に容れられたカリーナを買い取ったのは好色家で知られる貴族だった。

幼いながらも美しさがあったカリーナを気に入って競り落としたのであった。

貴族が帰国することとなり、船にのせられたカリーナ。

しかし、彼女は両親に会いたい一心で走る船から海へと飛び込んだのであった。



何とか近くの島に流れ着いたカーリーナは、両親から教えられたある技術を駆使して両親の元に帰るための資金を作り始めた。

それが、盗みだった。

子供だからこそ侵入可能なルートを駆使して盗み続けた。

換金の際には子供だからと低く査定されることは日常茶飯事だった。

それでも、両親に会いたい一心で彼女は盗み続けた。

気がつくと、新世界から東の海に流れ着き3年の月日が流れていた。

そして、現在彼女は人生最大の窮地にたたされていた。

—————

「もう一度だけ聞こう。女狐”カーリーナ、お前ほどの盗賊が何で傷だらけで漂流なんかしてんの」

一目見たときから、自分の中に育った”快盗の勘”が警告をならしていることにカーリーナは気がついていった。

目の前の男レイズは口調は碎けているが、先程の柔らかな笑みと違い、目が笑っていないのだ。

嘘をつけば殺される。そんな考えが頭をよぎるほどだった。

「ま、バレてるなら仕方ないか。実は此の辺りで仕事をしたんだけどね、思いの外身体が成長してみたいで今までだったら通れてた場所でつかえちゃってね」

そう言ってカーリーナは年不相応に育った胸を腕を組むことで持ち上げ、レイズに見せつけ反応を試した。

しかし、自分から一切視線をそらさないレイズに少しだけ女のプライドが傷ついたのはカーリーナの秘密である。

一方のレイズも内心では某一味のコック(未定)のように目をハートにしメロリンしていたのであった。

「その時に、その城主に出くわしちゃってね。しかもそいつがジャラジャラの実の能力者で、此の有り様よ」

そう言いながらも悪戯小娘を思わせるおどけた笑みを浮かべた。

その時、カーリーナは暖かな暗闇に覆われた。

まるで、暖かな布団にくるまれていようような安心感が彼女を包み込んでいた。

「・・・や、やだなレイズ。いくら私が美少女だからって急にこんな「もう、良  
いから」

カリーナの耳にレイズの声が聞こえてきた。

「カリーナ、もう良いから。頑張ったな、本当に頑張ったんだな」

そう言うレイズの声が震えていることにカリーナは気が付いていた。

それだけではない。

レイズを退けようとした手に水が落ちてきているのが分かった。

そして、それが涙であることも。

「お前にとっては、憐れみの行動だと断じられてもオレはなに言えない。だけど  
な」

—泣いてる女の子を平気な顔で見られるほど汚くなれないんだ—

カリーナがはっきりと覚えているのはここまでだった。

—————

「もう、良いのか」

カーリーナが泣き疲れて眠ったのを確認して部屋を出たレイズへと声をかけたのは湯気がたつミルクが入ったカップを両手に持ったエースだった。

「なんだ、やっぱり聞いてたんじゃないか」

「まあ、あれだな。悪かった任せたのに」

そう言ってカップを差し出すエースとそれを受けとるレイズ。

扉の前、二人はただただじっと立っているだけだった。

「なあ、レイズ」

暫しの沈黙の後にエースは意を決したように切り出した。

「前にお前が話してくれた“人拐い村”の話だけど」

「ああ、恐らくカーリーナはその“商品”出身だろう。本人も薄々気がついていてみたいだったかな」

賞金稼ぎ時代レイズは少なからず政府主導の作戦に参加したことがあった。

その一つが新世界のとある島を拠点にしていた人拐い屋の殲滅作戦だった。

その村は大人全てが人拐い屋を生業にしており、子供を赤ん坊の頃に拐ってきてまるで家畜を育てるように育て、ヒューマンショップに売り捌いていたのだ。

彼らは、必要とあれ町一つを虐殺して赤ん坊を全て拐ってくる残虐性を持っている。

いくら世界政府加盟国に“お得意様”がいたとしても、庇いきれる範囲にも限度があった。

そして、人拐い村は村民全員が賞金首となり、海軍主導の殲滅作戦によりその全てを消されたのだった。

その作戦にレイズは参加していたのだった。

皮肉なことにこの作戦に参加したことでレイズは「風迅」の異名を得たのであった。

「カリーナの奴、この後どうするんだろうな」

エースとて“鬼の子”、知られれば確実に良い未来は訪れない。

そんな自分よりも、カリーナのことが心配でならなかった。

「なんで、世界はこんなにも残酷なんだろうな」

エースのそんな呟きを最後に二人の間から会話がなくなった。

まだまだ頑張りますよ

## Cの快盗／激情と兆し

パソコンの不調により書いていた半分が消える。

でもアオハル・ナミ編見て復活。

オレって結構安いな。

カリーナにとって夜とは最も恐ろしいものだった。

暗闇が自分を覆い隠し、この世界に自分は必要とされていない錯覚に襲われるからであった。

そんな彼女は、久しぶりに夜に眠りについてた。

なぜだか知らないが、「あの二人」を感じれるこの船は大変落ち着けたからであった。

翌朝、久しぶりに熟睡したカリーナが甲板に顔を出すとそこには目を疑う光景が映し出された。

深夜、甲板で夜空を見上げるエースがいた。

エースはこの世の不条理を嘆くだけだった子供時代に思いをはせていた。

義兄弟が無残に殺されたと知った後、ダダンに止められてもなお、敵討ちに行こうとした。

しかし、その夜ダダンが電伝虫を使用しているのが聞こえてきた。

「ガープさんよ、あたしにとってエースもサボもルフィも正直”ただのクソ餓鬼”なんだよ」

口から出てくる言葉とは裏腹にその声には悲壮感が滲み出ていた。

「エースはクソ生意気なクセして無鉄砲で、誰にでも喧嘩吹っ掛けるようなやつだ。でもよ、あいつの心根は誰よりも真っすぐなんだよ。」

ルフィは甘ったれでエースとサボの後にくっついてるだけのななたれさ。

そんなあいつは誰よりも自分に正直なんだ。



サボも、生まれを知った時は心底驚いたけど、あいつが一番真っすぐに生きようとしてたさ。

でもよ、なんでだよ。

なんでサボは死ななきゃなんなかったんだ。

悪いけどガープさん、しばらくウチに顔出すのは控えてください。

今、あんたの顔見ちまったらあたしは、あたしは歯止めが利きそうにないんでね。後、これだけは言わせてもらおうよ。

あたしの馬鹿“息子”達を二度と理不尽にさらすんじゃないねえ」

実の親の顔を知らないエースにとって、この時初めて“母親”が生まれたように思えた。

口を開けば喧嘩になり、何かあるとすぐ殴られる。

旅の門出にも顔を出しもしなかったクソババアだったけど、それでもエースは愛してくれたと感じることが出来ていた。

「なあ、ダダン。オレはお前が胸張って“息子”って言ってもらえるだけ立派になつてやるぜ」

カリリーナの出生を聞いてからレイズとの間に会話はなかった。

互いに思うところがあるのだが、前に進んでいるカリリーナへどのように力になってやればいいのか解らなかったからでもある。

ただ一つ、己の真ん中に熱い炎のような何かが灯ったような気がしたのだった。

「・・・・・エース」

甲板へと続く唯一の扉の前にレイズが立っていた。

「お前に、この間言ったこと覚えているか」

そう言って右手に握られた“手配書”を風に乗せてエースに投げるレイズ。

そこには、最近発行されたばかりの1000万ベリーの賞金首と900万ベリーの賞金首の顔が映し出されていた。

「カリリーナを痛めつけたのはたぶんこいつらだ。貴族のくせに海賊を名乗って好き勝手やってきたツケがこのザマだ」

「鎖縛さばくのジャラララ”懸賞金1000万、”鎌鼬のビュンゾウ”懸賞金900万か」

「そして、”運の悪い”ことにそいつらがこっちに近付いてきてるんだ」

レイズのその言葉を聞いたエースの顔は憤怒に染まっていた。

「なあ、レイズ」

いつもの調子でレイズへと声をかけるエース。

「カリーナの部屋には、サイレント・カーテン静寂の羽衣”を展開してあるから音は遮断されている。

カリーナ自身にも”リジエクト・アウト良の鎧”掛けてあるから手は出させない」

レイズも普段と同じ調子で声をかけているが、普段の二人からは考えられないほどに、周囲の景色が歪むほどに怒気が溢れていた。

「ジャウラジャラジャラジャラジャラ、ジャウラジャラジャラジャラジャラ。あの船かあの餓鬼が乗っているのは」

体中に鎖を配した服を着た巨漢の男が大声をあげながら笑っていた。

「はい、ジャラジャラ様。”ビブルカード”はあの小さな船がある方角に動いておりますので、はい」

その横にいる刀を腰に差したモノクルを上下に頻回に動かす執事風の男が報告を上げている。

「しっかし、ビュンゾウの言う通り“あの小娘”をとっ捕まえた時に爪を切らせておいて正解だったぜ。まさか逃げられるとは思ひもしなかったからな」

「いえいえ、私たち一同“若様”のお手を煩わせることこそなきように努めておりますゆえ万全を敷いたまでのこと」

甲板に鎮座する豪華絢爛なソファに体を預け肥え太った肉体を揺らし笑い声をあげるジャラララ。

その横では表情を一切変えることなく、手元のビブルカードと呼ばれる不思議な紙を見続けるビュンゾウ。

「しかし、この木偶の坊に付いていくのもそろそろ限界かと。あの小娘を捕らえ小娘で遊んでいる隙に本国と連絡を取り私の今後の安定を確約させなければ」

ビュンゾウにとってジャラララに付いてきたのは、自身が故郷で行っていた残酷非道な行いの追及を逃れるためとジャラララの父親である某国の国王に恩を売るためである。

某国親衛隊に所属していたビュンゾウは居合の名人であり、国に仇なす存在を今まで何人も斬り殺してきた。

一方で、彼は生粋の切り裂き魔だった。

軍に入ったのも定期的に人を斬れるからであつた。

そんな彼の本性を見抜いていた当代の国王はジャララのお目付け役を任せ、二人を国外で亡き者にする計画を遂行したのである。

無論、ビュンゾウにバレているとは知らずに。

ビュンゾウが今後の身の振り方を考えているその頃、見張り台にいた兵士は一つの違和感を覚えた。

望遠鏡でよくよく覗いてみるとそこには自分の常識をはるかに超えた景色が映っていたのである。

「若様、団長」

見張りの兵士の声が聞こえ見張り台の方に視線を向けるジャララとビュンゾウ。

「ジャウラジャラジャラジャラジャラ、どうした」化け物「でも見えたのか」

ジャララは能力者になって以降無敗を誇っていた。

それはビュンゾウが勝てそうな人間を判別していたのも大きい、この東の海に

おいて“能力者”であることは大きなアドバンテージを占める要因になる。

勝ち続け、もともとあつた虚栄心が肥大化していたジャラララは見張り台の兵士の声に“怯えの感情”が含まれていることに気づきもしなかったのである。

「う、海を。海を走り抜けてくる者たちがいm」

兵士は最後まで報告することが出来なかった。

なぜなら、彼のいた見張り台が突如として“削り取られた”のであった。

「おうおうおうおう、これまた大層な船だな。おいレイズ、オレは我慢しないでいんだよな」

甲板に現れたオレンジのテンガロンハットを被り鉄パイプをステッキのように器用に回す青年が隣の男に声をかけた。

「そうだな、エース。あの“贅肉ダルマ”がお前の相手だ。後の“雑魚”はオレに任せろ」

まるで、これから買い物にでも出かけるような気軽な様子に周囲は困惑していた。その中でジャラララとビュンゾウは其々に違う思いを巡らせていた。

「どっちも細っちい上に無礼だな、ワッシに逆らうとどうなるか教えてやるぞ。者

どもかかれ」

ジャラジャラのその声に反応した兵士が一齐に二人へと襲い掛かった。

攻撃の間合いまであと一步というところで兵士たちは突如として、得体のしれない寒気に襲われた。

その寒気は自分たちの目の前にいる二人の青年から発せられていた。

すると、今まで目を合わせることもなかった二人の青年と誰しもが目が合ったように気がした。

その時だった。

「うるせえよ、お前ら黙れ」

それは、大声ではなかった。

それは、怒りに任せた声ではなかった。

しかし、二人の声を聴いた甲板上にいたすべての兵士が、二人の声を聴いた瞬間に気絶してしまったのであった。

その異常ともいえる光景を前にビュンゾウは警戒心を露わにしていた。

「(今のは、まさか。イヤこの東の海最弱の海にましてや、あんな小僧共が“あれ”の使

手なはずはない」

ビュンゾウが刀に手をかけながら自分の思い浮かんだ考えを否定するように顔を振る。

そんな中、ジャラララは形容しがたい顔をしていた。

「お前ら、一体何なんじゃ。ワッシを誰と心得ておる」

この期に及んで自分の立場を理解しようとしないうジャラララの顔にエースと呼ばれていた男が2枚の紙を投げつけた。

その紙は突然の突風によりジャラララの顔に張り付いた。

「ああ、知ってるよ。手前らは薄汚ねえ賞金首ってことは」

そう言って手に持っていた鉄パイプをジャラララへと向けるエース。

「手前が何者だとか”どうでもいい”んだよ。手前はオレを怒らせた」

エースの頭に先ほどレイズに泣きついていたカリーナの声が聞こえてきた。

“本当は解っていたんだ、でも認めたくなかった”

その声には彼女のこれまでが詰まっているようだった。

“認めちゃったら、私には何もなくなっちゃうから”



この世の理不尽を自分も体験してきたつもりになっていた。

“大好きだったお父さんもお母さんも嘘になっちゃうから”  
ふと隣を歩くレイズを見る。

“そうしたら、わたしまで”ウソ”になっちゃうから”

レイズの顔は一緒に旅するようになって初めて見る“無表情”だった。

“わたしはいなかったことになくなっちゃうから”

エースとジャララの視線が合う。

“ひとりはもういやなの”

レイズとビュンゾウの視線が合う。

見張り台の残骸から双眼鏡が落ちてきた。

双眼鏡が甲板に落ち壊れる音ともに戦闘が始まるのであった。



## Cの快盜／故に彼は風と共にある

今さらですが、レイズの使用する技のもとネタは「東まゆみ」先生の「EREM ENTARGERAD」から引用しています。

作品も大変面白いので機会がありましたら是非読んでください。

レイズが「フェンシルバード・レイズ」となり「風迅」の名を得てしばらく、レイズは自身の能力を研究し始めた。

自身の能力を「正確に」把握することこそが能力者の力の向上に繋がることを知っていたからである。

何ができて、何が出来ないか。

どういった応用が出来るのか。

「エア」とは何を示すのか。

自身の戦いの経験値を稼ぐために賞金稼ぎをしながら、能力を使い続けたある

日、レイズは自身の能力である“エアエア”の能力の一部に手を触れることが出来た様な気がしたのであった。

—————

“かまきり鎌斬のビュンゾウ”

元はとある王国の国王直属の護衛部隊に所属する剣士だった。

次期国王であるジャララの護衛のため、ひいては王に恩を売るために、ジャララの護衛を買って出た彼は海に出て運命的な出会いをした。

とある商船を襲った際に、偶々目についた箱。

中身覗くと其処には奇妙な形のフルーツが置かれていた。

そのフルーツにまるで魅了されたかのように手をとりビュンゾウは気が付いたらフルーツに噛りついていた。

あまりの不味さに思わず残りを床に叩きつけてしまったが、彼は奇妙な感覚に目覚めていた。

自身の握る刀に周囲の風が纏わりついてくるのである。

試しに、刀を振るうと振るった先にあつた扉が斬り裂かれたのであつた。

以降、ビュンゾウはこれまで以上に“人”を斬ることに執着するようになったのである。

「カーマ、カマカマカマカマ。名持ちの賞金稼ぎと言っても所詮はこの程度か」

ビュンゾウとレイズの戦闘は開始当初からレイズが圧される形となっていた。

ビュンゾウが刀を振るう度に発生する鎌鼬による遠距離攻撃。

よしんば、その鎌鼬を潜り抜けたとしてもビュンゾウの達人とも呼べる剣士としての実力にはレイズは一切の攻撃を許されないように見えていたのであつた。

「それに、貴様。貴様もどうやら能力者のようだが、私の鎌鼬によって受けた傷から血が出ていることから見て、動物系か超人系に属する能力のようだが、どちらにしてもこのビュンゾウ様の敵ではないようだな」

事実、レイズは先程からビュンゾウの鎌鼬による攻撃を避けているだけにとどまっており、身体には数ヶ所とはいえ傷ができていた。

ビュンゾウの高笑いが木霊する戦場。しかし、ビュンゾウは自身が強者であると

信じて疑わなかった。

だからこそ、気付けなかった。

レイズの顔に一切の表情が消えていることに。

—————

「ええ、レイズの能力は超人系なのか」

まだ旅を始めたばかりの頃、レイズに彼の能力について聞いた時、あまりに予想外で、エースは驚きの声をあげてしまった。

「まあな、事実オレは自然系の最大の特徴とも言える。身体を自然物そのものに変化させる”ことが出来ない”」

そう言って器用に風を操り倉庫の中を片付けていくレイズ。

周囲には大人が複数人で運ぶような木箱がいくつも風に支えられ中に浮いていた。

「それじゃ、この間の攻撃をすり抜けたように見えたのは」

「ああ、あれはだね・・・」

ジャラララと相對しているにも関わらず、身体に力が漲っているのを感じていた。エースはふとレイズの能力について聞いた時のことを思い出し出していた。

「小僧、ワッシを前にして随分と余裕そうじゃないか」

あまりにも自然体なエースを奇妙に思い、攻撃の手を緩めているジャラララ。

「おう、悪い悪い。あまりに退屈でな、相棒と話した時のこと思い出しちゃった」  
そう言って欄干へと器用に着地するエース。

「ジャウラジャウラジャウラ、今までどうだったか知らんがビュンゾウを相手にして生きていられる筈がなかるうに」

そう言って両手に握られた鎖を再び振り回し始めるジャラララ。

だが、エースは確信していた。

「そうかな、お前たちの最大の不運はオレ達を怒らせたことなんだぜ」

—————

ビュンゾウは違和感を感じ始めていた。

先程から鎌鼬を飛ばし続けているのに、レイズに対して一向にダメージを与えられなくなっているのであった。

そして、レイズは一步一步ただビュンゾウに向かって歩いて来るだけで、一切避ける素振りをみせないのであった。

それなのに、自分が放つ鎌鼬が勝手に逸れていくのである。

「オレのな」

突如、レイズが何かを話し始めた。

「オレの能力はな、自分を中心にした半径5m圏内の空気に干渉することで、自在に空気を操ることができるんだ。有効範囲も延び続けていてな、特に有効範囲内の空気の精密操作なんか最近じゃ簡単に出来るようになったのさ。その力を活用したのが今、オレが使用している『コレ』。名前を『リジエクト・アウト良の鎧』って言うんだ」

ビュンゾウが目を凝らすと、レイズの周囲には幾つもの風が折り重なったような大気の流れのようなものができていた。

「周囲に風の障壁を発生させて、降りかかる攻撃の軌道をそらすことで攻撃を防ぐ



技なんだけどな。ま、あくまで風だからか、オレの実力以上の攻撃は強引に突破されることもあるんだけどな、あんたの攻撃は簡単に反らしちまえてるこの現状。あんたなら、言わなくても理解しているよな」

坦々とただ歩み寄ってくるレイズの姿はビュンゾウにとって悪魔か死神のように見えていた。

「カリーナの左肩」

レイズの独白とも取れる言葉には一切の温度が感じられなかった。

其処には怒りな任せた灼熱も、殺意によって発生した冷気も一切なく、ただ坦々とビュンゾウの耳に流れ込んでくるように感じられた。

「カリーナの左肩にな、素人に斬られたような痕があったんだ。鎖による殴打痕でもなく、明らかな刀傷の痕だった。ま、斬った相手がド三流のド素人だったからか傷痕も残らなそうだけど」

不意に、レイズとビュンゾウの視線があつたような気がした。

その時、初めてビュンゾウは正面からレイズの瞳を見てしまった。

その瞳は、まるで硝子玉のようにビュンゾウを写しているだけだった。

「お前にカリーナ以上の価値は無い」

右手を手刀の形をとると、それを前後に揺らし始めるレイズ。

ビュンゾウは何をしているのか分からなかったが、自身の背に嫌な汗が流れるのを感じていた。

手に持つ刀はガタガタと震え、自分が相手に怯えていることに、自身の能力を使う余裕もレイズが纏っていた風の鎧が消えていることに気が付く余裕すらも失われていた。

「乾の魔槍」  
ブラスト・ケニル

レイズの腕が自分に向いてるのを見るよりも早くビュンゾウは愛刀での防御を試みたが、刀が折れるのと同時に自分がまるで風の槍で貫かれたような衝撃を受けて反対側の欄干に叩き付けられるのを感じた。

ビュンゾウの意識はそこで途絶えたのだった。

「お前は殺す価値もない」

意識を失ったのを確認したレイズはビュンゾウを縛りつけ、樽が満水になるまで海水を汲み、其処に縛り上げたビュンゾウを放り込むと空に輝く月を見上げた。

「さあ、エース今のお前の実力をオレに見せてくれ」

レイズの頬を夜風が優しく撫でていくように吹き抜けて行くのだった。

アンケートを実施致します。

皆様ご協力のほどよろしくお願い致します。

(期限は年内を予定)



## Cの快盗／その心に灯る焰

この小説を書いていると私の作品制作において東映特撮（主にライダー系）の影響を多大に受けていることに今更ながら気づきました。

今回、本文内でエースとある仮面ライダーの名セリフを言っていますが、大人になってもやっぱり彼らは永遠のヒーロなんだと改めて実感しました。

2ヶ月。

エースとレイズが旅を始めてからそれだけの月日がたった。

その旅の中でエースはレイズから色々なことを教わった。

簡単な航海術、簡単に作れる料理、綺麗なお姉さんのいる店での楽しみ方、格好良く見える酔いにくい酒の飲み方、猿でもわかるギャンブルでのイカサマの仕方。

良くも悪くも色々なことを教えてくれるレイズはいつしかエースの中で嘗ての相棒と同じレベルで信頼のおける存在になっていった。

そんなある日、海賊になったらどっちが船長をはるかと言う話になった。

「そんなもん、エースがやりゃ良いだろ」

「そんなもんでレイズは船長やりたくないのかよ」

カリーナを釣り上げる前の晩、レイズが作ったノンアルコールを飲みながら話したのを何故かいまエースは思い出していた。

「レイズは船長に興味ないのか」

ストローを指したカクテルグラスを遊びながらエースが聞くと食べ物で遊ぶなどレイズに小突かれた。

「いいかエース、オレはな……」

---

ジャラララとエースの戦いはジャラララが振るう鎖の嵐をエースが一方的に避け続ける展開となっていた。

「ジャウラジャウラジャウ、巧くよけるじゃないか。しかしいつまで持つかな」

掌から打ち出される鎖を振り回し続けるジャララを前にしてエースは自分がひどく冷静であることに驚いていた。

「(コレならいつもレイズとやってる模擬戦の方が何倍も手強いな)」

レイズと出会い、<sup>クッジジイ</sup>ガープによる虐待擬き<sup>訓</sup>とは違う、本当の意味での特訓を受けるようになり、エースの実力は格段に上がっていった。

賞金首を捕らえ、つれていった先の海軍支部で海兵を交えた戦闘訓練、無人島を見つければレイズによる広範囲攻撃に対する実践講習。

ただ危険地帯に放り込まれていたあの頃と違い、その一時一時が確実に自分の力になっていくことをエースは実感していた。

特に、<sup>フ</sup>風 という目視しにくい攻撃を受け続けたことで、目に写る攻撃ならある一定までなら避けられるようになっていた。

ジャラララの鎖による攻撃は今のエースにとっては簡単に避けられてしまう程度の速さしかなかった。

「(こいつ程度に苦戦するようじゃオレはレイズに顔向けできねえ)」

「オレはな、**“夢”**がなかったんだ」

あの日、どちらかが船長をやるかという話し合いの中でレイズがぼつりとつぶやいた。

「**“世界一周”**、**“国王になりたい”**、**“腹いっぱい旨いモノ食べたい”**、**“誰も見たこと**がない景色を始めて目にしたい” そういった夢や野望っていうのがなかったんだ」

エースにとってそれはレイズが零す初めての弱さだったかもしれない。

旅をするようになり、エースは何かにつけてレイズと一緒に行動した。

情報収集がてら歓楽街に行くこともあった。

賞金首を捕らえにスラム街へと足を踏み入れることもあった。

海軍に賞金を受け取りに出向き、そのまま賞金すべてを一晩で遊びきった。

どれもこれも、初めての経験だった。

レイズには言っちゃらないと決めているが**“兄貴”**がいたらこんな感じじゃないかとずっと思っていた。



そんな男が漏らした初めての弱音だった。

「だから、新世界に一度帰って今後をどうしようか考えようとしてたんだがな。そんな時に“とんでもないアホ”に会っちゃったんだ」

そう言って真っすぐに自分を見てくるレイズ。

その瞳には綺麗な焰が灯っているようだった。

「そいつは、初めて会ったばかりの人んちの冷蔵庫を空にしちまう考えなしで、悪びれもせずに豪快に笑いながら楽しげに笑うんだ。海に出たばかりっていうのを差し引いても無計画すぎて目も当てられないアホなんだな。そんなアホは空っぽのオレを海に誘ってくれたんだ」

そう言って立ち上がるとエースの頭を乱暴に撫でまわした。

「そんなアホがどんな将来を描くのか、もしこいつが大物になるならその姿を間近で見てみたい。そう思ったんだ」

そう言って頭からてを離すと甲板へと足を進めた。

「だからよ、オレにとってお前がこの先の道標なんだ。あんま頼りにはしてないけど、お前がオレやこれから仲間になる奴らの前を走り続けてくれ」

「(オレよりも強くて、何倍も賢くて、大人で、カッコイイ。そんなレイズがオレを“頭”<sup>カシラ</sup>として認めてくれたんだ。そんな男に)」

今まで伏せていた顔をジャラジャラに向けるエース。

その顔には“覚悟”が映し出されているようだった。

それは、何の信念もなく、自分が優れていると勘違いしているジャラジャラには出来ない顔であった。

「オレは、そんなレイズに顔向けできねえような男にはなりたくねえんだよ」

そう叫ぶとエースは鎖の嵐の中を猛スピードで駆け抜けていった。

闇雲に走っているように見える行動だがよく見ると手に持った鉄パイプでジャラジャラの放つ鎖を絡めながら走りぬけていた。

鎖がすべて鉄パイプに巻き付いたのを本能的に理解したエースは鉄パイプを甲板に突き刺しジャラジャラの動きを完全に封じ込めてしまった。

その肥えきった体では身動き一つできないジャラララは目の前に来た鬼のような形相の青年に対して思わず弱腰になっていた。

「ジャ、ジャウラジャウラジャウラ。お、お前気に入ったぞ。オレ様の“部下”になれ」

怯えながらも自分が絶対の強者であることを疑わないジャラララはエースが自分にへりくだる姿を幻視していた。

「黙ってる、この馬鹿野郎が。誰が手前みたいなクズの下に就くか」

ジャラララを見るエースの瞳は凍えるような寒さを感じられた。

「お、お前。ワッシが誰なのかわかっているのか。ワッシに手を出したらどうなるのか覚悟はできてるのか」

ジャラララはついに自分の立場を振りかざすことでエースを退けようとしてきた。

「は、出来てるよ」

しかし、それはエースには何も意味をなさなかった。

なによりも自由でありたいと願うエースにとっては。

その時、この場にいる誰もが気が付いていなかった。

エースが握りしめた右手が黒く染まっていることに。

「心火を燃やして、手前をぶっ潰す」

そう言ってジャラジャラの顔面を黒く染まった右手で思い切り殴りつけるエース。

ジャラジャラはその勢いのまま後方へと吹き飛ばされ、海に落ちていった。

「は、手前じゃオレのちきん石にもならなかったな」

決め顔をするエース。

そして、そばに寄ってきたレイズを見つけると子供のような笑顔で出迎える。

「どうよレイズ。オレの成長ぶり」

「ああ、ま、合格じゃない」

頭を掻きながら何かを告げようとしているレイズと得意げに笑っているエース。

「なあ、エース」

「なんだよ、こんなことで褒められても嬉しかねえぞ」

「もしかして試金石って言いたいのか」

数秒後、顔を真っ赤にして海に飛び込むエースがいた。

カリリーナが甲板に顔を出すとそこには所狭しと金銀財宝多種多様な宝石が所狭しと乱雑に置かれていた。

「おう、カリリーナ起きたか」

財宝の中央に寝転がっていたエースがカリリーナに気が付き声をかけてきた。

「なんなの、この財宝は」

さしものカリリーナですら自身が見ている光景を疑っている。

昨晩まで何もなかったはずの甲板には小国の国王ですら目を回しかねない量のお宝であふれていた。

「ちよつと待っててくれ。今レイズがここの支部長に話つけにいつてるからよ」

そう言って再び寝転び空を見上げたエース。

そんなエースにつられる様に空を見上げたカリリーナ。

そこには雲一つない青空が広がっていた。

アンケートに関しまして期限は年末としましたがある程度集まりましたら期限内であっても終了させて頂いたいただきます。

ホルホルネタはいずれ小ネタとして扱います。

Cの快盜  
We Are

今週のワンピースは何やらスゴいことになってますが、今後どうなるのでしょうか

「(私としたことが、まさかあんな餓鬼に痛手を負けられるとは)」

ビュンゾウは新世界への護送船へと歩く道すがら、自分を敗北させた男のことを思い出していた。

今思い出しても、何故かあの時の恐怖は蘇らず、まるで自分が負けたこと自体が悪い夢に思えてしまうほどだった。

「(そう、ちょうど目の前の海兵と同じぐらいの年齢であったな)」  
自分の目の前を歩く海兵。

階級も低そうだし、何より“強者の匂い”がまるでしなかった。

これから、自分に起こるだろうことを考えていると、その目の前の海兵が話しか

けてきた。

「ビュンゾウ殿、確認したいことがあります。宜しいでしょうか」

そう、罪人である筈のビュンゾウへ最高礼をする海兵に気を良くしたビュンゾウはふと顔を上げてしまった。

次の瞬間、自分の胸に何か突き刺さる感触がした。

恐る恐る確認すると、自分の右胸に目の前の海兵の人差し指が突き刺さっていたのであった。

「き、貴様、何を「C.P.9.H.O.U.D.L. 貴様の存在が公になることは世界政府の威信に関わる。よって『闇の正義』の名のもとに貴様を殺す」

そう宣言した青年は指を引き抜くのと同時に姿を消した。

青年の立っていた後ろには、肩から切り裂かれ絶命したジャラララの遺体が横たわっていた。



「それじゃ、アイツ等の船にあった資産の90%と懸賞金は半額を貰い受けますからね。良いですね」

ジャラララ達を討ち取ったエース一行はレイズが鼻唄にしている海兵が勤めていた支部へと来ていた。

エースとカリーナを船に残し、レイズはジャラララ達の身柄の引き渡しと懸賞金及び海賊の資産の取り押さえにて生じる追加報酬の相談をしていた。

レイズの対面には実質この支部を取り仕切っている海軍本部所属の男性海兵が座っていた。

「返事くらいして下さいよ、スモーカーさん」

名を呼ばれ、対面にてヤのつく自由業顔負けのふてぶてしさを醸し出している、葉巻を豪快に3本同時に吸っていた男「スモーカー」が気だるげにソファアから上半身を起こした。

「ああ、勝手にしやがれ。俺が「この支部」にいたのもあと数時間。テメエのその張り付けた笑顔も、見納めだと思おうと清々するぜ」

机に足をかけ寛ぐその姿は罷り間違っても海兵には見えなかった。

「で、今頃アイツ等は世界政府に消されているということか。いったい何処までがテメエのシナリオ通りにいったんだ」

右手に握っていた十手をレイズに向けるスモーカー。

「いやいや、どこぞの王様や支部長からリークされた情報を元に計画練ってたところに『女狐』が現れたんですよ、完全にアドリブですよ」

スモーカーの言う張り付けた笑みは消え、そこにはエースやカーリーナには見せたことのない冷酷な笑みを浮かべたレイズがいた。

「まあ、オレはテメエが『海賊』にさえならなければ問題ないがな」

「はは、それはどうかね」

数分後、鼻唄混じりで部屋を後にするレイズ。

先程自分に見せた冷酷な顔を思い出し、背筋に寒気が走るスモーカー。

「……………まったく、テメエが相手じゃ骨が折れる」

それは、独り言のように消えていった。

「この顛末を話すとこんな感じだ」

「はあ、エースって強かったのね」

船の甲板にて金銀財宝をベッドにしてジャラララとの戦闘経緯を話すエースと何故かレイズのワイシャツを着たまま話を聞くカーリーナ。

現在、二人はレイズの交渉待ちで暇になってしまい昨晚の顛末をエースの主観混じりで話していた。

自分が眠っている間に起きたことの凄さに改めて驚きを露にするカーリーナだったが、ふとエースを真剣に見つめ、次の瞬間思いきり頭を下げていた。

「おいおい、カーリーナ何を「騙していたことも謝るし、雑用もなんでもやります。だから、この船においてください」

そう言うときカーリーナは更に体勢を低くしていく。

このまま、「次の姿勢」になられたらレイズからどんなお仕置きを受けるか分かったもんじゃないエースは慌てカーリーナを立たせようとした。

「・・・・・・エース」

しかし、時既に遅く振り向けば画面に文字を起こすことすら憚られるような顔をしたレイズがエースを蔑んで見ていた。

「お、オレは無実だーーーーー」

「悪かったって、そんなにヘソ曲げるなよ」

「エース、本当にゴメンね。この美少女に免じて許してよ」

支部を後にした船内では、実はからかわれていたことに気がついたエースが盛大に拗ねていた。

「・・・イジメ、カッコワルイ」

そう呟くとレイズが作ってくれたフルーツパフェをマグマグと食べては二人をチラ見するという行為をエンドレスで続けているというエース。

反対にレイズとカリーナはやり過ぎたなという苦笑を互いに漏らしながらエースの機嫌が治るのを遠巻きに眺めていた。

「今晚はレイズの特製唐揚げが出てくるなら、もう許す」

そう妥協点を提示するエースはとても幼く見えた。

「はいはい、元々今晚は大金が舞い込んだパーティーだったから出す予定だったから大丈夫だよ。あと、エースが頑張ったからブートジョロキアペペロンチーノも山

盛りで出すよ」

レイズのパーティーメニューを聞くと、端から見ても機嫌を治していることが丸解りな顔をしてレイズとカーリーナが座るソファアへと上機嫌で近付いて座り直すエース。

「よし、それじゃ許してやるよ。カーリーナも冗談がキツイぜ」

「あら、あながち『冗談』じゃないわよ」

その言葉と共にカーリーナは立ち上がるとエースとレイズ、二人が対面になるように移動すると再び頭を下げた。

「『女狐』カーリーナがない泥棒ですが、どうか一緒に旅をさせてください」

先ほどと違い、体からその言葉が真剣であることが伺える気迫のようなものがあった。

「ああ、いいぞ」

「さしあたって、カーリーナは航海士をやって貰おうか」

カーリーナにとって一世一代の覚悟を決めた懇願はかなり軽めに了承された。

「エース呼び出してゴメンね」

東の海であることとレイズの探知領域で船及び周辺に害意がないと解ると3人其々の部屋で眠りに付いた。

暫くしてレイズが完全に眠りに落ちたのを確認したエースとカリーナは船首で顔を合わせていた。

「別に良いけどよ、レイズに相談しにくいことなんだろう」

頭の中でオレ船長ぼいな、とか余計なことを考えているエースとは対照的に仲間になると宣言した時と同じ覚悟を匂わせたカリーナ。

「エースには話しておくのがスジだと思ったから」

カリーナはそう言うかと羽織っていたレイズのカーディガンで自分を抱き締めるように包み込んだ。

その仕草からエースは唐突に閃いてしまったのだった。

「(ま、まさかカリーナの奴オレに惚れたのか。いや、確かに今回のオレは自分で

言うのも何だが滅茶苦茶カッコ良かった」

勝手に納得していると意を決したカリリーナがエースを見据えた。

「あのね、エース」

「おう(レイズ、オレは今日大人になるぜ)」

「あたし」

「(明日からどんな顔してレイズに会えばいいんだろうか)」

カリリーナとエース、互いの心臓の音が聴こえているかのように周囲に静寂が訪れた。

「あたしね」

「おう(オレは準備出来てるぜ)」

「あたし、レイズが好きになっちゃった」

その瞬間、本当に世界から音が消えたような気がした。

「・・・え、今なんて」

自分の想像の斜め横に行く展開に目を丸めるエース。

「だから、レイズが好きになっちゃったの」

きゃー言っちゃったと体をくねらせてカーディガンの裾で顔を隠し恥ずかしがる  
カーリーナを前にやっと再起動したエース。

「あ、え、か、カーリーナお前」

うまく口が動かないエースを後目に火の付いたカーリーナは止まらなかつた。

「最初見た時から「ああアタシのタイプだなあ」、て思ってたんだけどあんなに優しく抱き締められちゃった上に、頭ナデナデしてくれて、それでねそれでね……」  
一度火の付いたカーリーナは止まることなくエースに自身の思いの丈をぶつけるの  
だつた。

「あ、あのよカーリーナ」解つてるわエース。確かにアタシも「あれ、アタシチョロ  
過ぎない」とか思ってたけどね、けどね」

カーディガンの袖で隠れていた顔を覗かせるカーリーナ。

エースは不覚にもときめいてしまった。

「カッコ良かったの」

そう言うともた顔を隠し照れ始めるカーリーナ。

「(オレは……?）」



心の中で叫ぶエース。

それを顔に出してないだけスゴいことなのだろう。

「だ・か・ら、レイズの相棒のエースにはそっち方面でアタシのサポートお願いし  
たくてね。」

それじゃ、ヨロシクね、せ・ん・ち・よ・う。

ああースッキリした。それじゃ明日からヨロシクねエース」

そう言うときスキップで船内に戻っていくカーリーナ。

エースはこの日、よく解らない失恋を、そして違う意味で相棒をめぐるライバル  
が生まれたのだった。

「なんだか、よくわからんけど」

海へと向き晴れ晴れとした顔をするエース。

思いきり息を吸い込んだエースは。

「良くわからねえけど、レイズの馬鹿野郎」

「ウルセエぞ、エース。さっさと寝ろ」

アンケートの結果、100票を越えたキャラが現れましたのでアンケートを終了させていただきます。

近々、別項目のアンケートを開始しますのでその際は、またご協力お願い致します。

## Dに集え／其々の今

ノックスヤバイ、けどそんな奴等と戦ったガーブとロジャーも同じくらいヤバイ気がついたらお気に入りか500件を越えていたことに驚きが隠せません。私のような物書きの作品でも楽しんでいただけているなら幸いです。

カリーナが正式に仲間になって気が付けば1年の月日が経っていた。

一口に1年と言っても様々なことがあった。

まず一つに船が新しくなった。

レイズの発案で中型のパドルシップに乗り換えたのだ。エースとカリーナは想いの詰まった船を乗り換えたくないと思えなかったが、いつもの通りレイズが一枚上手で、今まで乗っていた船をきれいに解体し、船を新造する際のパーツに加えたので駄々を止めて、自分の注文をし始めた。

3人でも手狭だった船を新しくしたのだからそれなりにお金は飛んでいったの

だが、そこはカリーナが「巧く」交渉したもんだから思いの外安くすんだ。

次に、エースとカリーナにも異名が付いた。

エースは鉄パイプを止めて、格闘術で相手を沈めていき、決め技とも言える正拳から「鉄拳」の異名が付いた。

カリーナもレイズに懇願した結果、旗を用いた棒術を修めている。

旗で己を守り、布槍術も応用した旗棒術とも呼べるカリーナ独自の技術で確実に戦えるようになっており、「女狐」とも「フラッグクイーン」とも呼ばれている。

そして現在、3人は新造した船を何故か海軍船に引かれ、海軍船の上」とある任務地へと連れてかれていた。

「エース、このバカもんが。何故「賞金稼」なんぞやっておる」

「ウルセエ、クソジジイ。オレの勝手だろうが」

乗船してから毎日のように繰り広げられるエースとこの船の責任者である中将の口喧嘩がまた始まった。

「か、カリーナちゃん。もしよかったら今度お茶でも」

「前も言ったけど、ウチの男衆に勝てたら考えたげる」

この1年で更に色香に研ぎがかかったカーリーナには、連日告白する海兵が長蛇の列を作っていた。

なお、この1年でカーリーナのレイズに対する好意は連日鰻登りであることを付け加えておく。

「・・・あ、王手」

「レイズさん勘弁してくれ」

当のレイズは海兵相手に連日如何様賭博で荒稼ぎしていた。

レイズからイカサマしてますよという宣言つきで、イカサマ見破れたら倍額返金を餌に日々あくどく稼いでいた。

賭けの対象には情報と技術も入っており、レイズは大まかな六式の情報とある石の情報を獲っていた。

—————

「ああ、痛ってえな。あのクソジジイ」

日が沈み、自分達の船へと戻ったエースたちは日々の報告会を行っていた。

「それにしても、エースと『海軍の英雄』ガープが知り合いだったのには驚きね」  
「本当にな。ほらエース、氷嚢でその腫れた顔冷やしとけ」

報告会とは名ばかりで大半はエースの愚痴こぼしのために開いている飲み会に近いのだが、頭脳労働ダントツになりつつあるレイズとカーリーナは別途ちゃんとした報告会を開いていたりする。

「しっかしよ、すげえな『六式』てのは。ジジイ相手に2分もつようになつたぞ」  
顔の腫れがひけたエースは最近習得し始めた体術『六式』の話題を挙げた。

「エースの習得スピードが異常なんだよ。聞いた話だと一式習得には最短でも一月掛かるらしいよ。しかも、六式を扱うための強靱な肉体が出来上がっている前提だから、ガープ中将の特訓も役に立ってことだね」

夜のおやつとしてドライフルーツを準備してキッチンから戻ってきたレイズの発言にエースは心底嫌そうな顔をした。

「にしても、エースにも苦手なモノがあったのね、意外といえど意外ね」

サマーセーターにホットパンツという青少年には目に毒な格好をしたカーリーナは

レイズを横に呼びつけながら、いつもの意地の悪そうな笑顔でエースを見た。

「ジジイの特訓受けたことねえカリーナには解らねえよ」

「ま、おかげでエースの底知れない生命力の根底を知れたから良かったよ。さて、俺達は今海軍船に牽かれて偉大なる海に居るわけだが目的地がわかった」

レイズはここ最近、ずっと様々な乗組員から情報収集を行っていた。

目的地が不明なのは3人共に不安があったからである。

エースは自身の出生のため。

レイズは血縁のため。

カリーナは今までの行いのため。

だからこそ、レイズはどのような手を使っても情報を獲ていた。

「しかし、ガープ中将は『あれ』で良いのか？少し煽って孫の自慢話聞いたらすんなり喋ったぞ」

軽く言っているがぶっ続けで15時間話を聞き続けたレイズの忍耐力があったか  
らの結果であるのだが。

「で、目的地はどこだったの？」

「そうだそうだ。ジジイのこと何かほっというて教えろよ」

レイズの横を陣取り腕を絡めようとして顔を真っ赤にしているカーリーナ。

その反対側にどかりと座りレイズと肩を組んでカーリーナに勝ち誇ったドヤ顔をす  
るエース。

その光景は親を取り合う兄妹のようだった。

「目的地は海軍造船島、途中でもう2人名持ちの賞金稼ぎを拾ってかららしいけ  
ど」

エースとカーリーナの目が獲物を狙う狩人のように細まる。

「目的はそこに現れる「海軍最大の汚点」とも呼ばれる「將軍」の異名を持つガス  
パーデとその一味の討伐準備と討伐だ」

—————

ここは偉大なる海にあるとある島。

黒帽子を被った細身の男がガスパーデの手配書を憎悪の眼差しで見っていた。



「アデル、お前の敵はにいちやんが必ずつけてやるからな」

同時刻 島でただ一軒の酒場。

そこでは長刀を背負った銀髪に褐色肌が特徴の青年が窓から見える月を肴に酒を静かに楽しんでいた。

「・・・オレの求める道はどこにあるんだ」

いま、歴史がまた一つうねりをあげ始めた。

アンケートその2を開始します。



## D に集え／風迅と海賊処刑人

「お前が『海賊処刑人』か」

「あんたが迎いかよ、『風迅』」

死屍累々の海賊たちを周囲に積み上げ、方や黒く輝く鉄扇を打ち付け獲物を狙う猛禽類のような眼光を曝すレイズ。

方や近場に落ちていたモップの柄を打ち付け圧されまいと堪える野獣のような笑みを浮かべた『海賊処刑人』と呼ばれる男。

何故二人が戦闘を行っているのか。

時は1時間前に遡る。

「エース、悪いんじゃがお前さんたちに今回依頼した賞金稼ぎ2人を迎えにいつて欲しいんじゃ」

ガープの海軍船の甲板にてレイズディーラーによるポーカーを行っていた時、突如ガープから声をかけられた。

「ああん、どういふことだジジイ。何で俺たちが迎えになんざ行かなきゃなんないんだよ」

レイズとカリーナの見事な連携による絶妙なゲーム操作により金庫の中身が充実していた時に声をかけられたエースは不思議そうに顔をあげた。

その疑問に答えたのは、ガープの副官を任されたばかりの「ボガード」と呼ばれていた海兵だった。

「潜入させていた海兵からの連絡で、奴等は此方の情報を一部把握しているようだ。君ら協力者の情報を得ていないことは確認がとれたので、今回はそれを逆手にとり、君らには“DEAD END”レースに出るための仲間集めの名目で接触してもらおう」

「それはいいんですけど、待ち合わせ場所と時間を教えてもらえませんか」

知略班であるレイズとボガードは仕事外の付き合いで友好に付き合いを深めており、数日に一回エースたちの船で愚痴を言い合う仲となった（99%がボガードのガープに対する物だが）。

「それはワシが決めておいた。“海賊処刑人”がああ島の中央にある噴水広場に“午

後1時”に、“銀獣”があゝの島の東にある高台に“13時”に来る手はずになつておる」

ガープの自信満々な発言を聞いた周囲全員が一度首を傾げた。

そして、近くの者同士で何やら話し始めること5分ほど、副官のボガードにその役を押し付けた。

「ガープ中将、まさかと思ひますがこれから向かっている場所が“海賊島”に準ずる場所である事と、“午後1時”と“13時”が同じ時間である事は理解されていますよね」

全員が固唾をのんで見守る中、ガープは呑気に海苔煎餅を齧っていた。

「ふむ、忘れ取った」

「「「「「「ウソだろ

「「「「「「」

甲板に異口同音の悲鳴が木霊する中、嫌な予感がしたカリーナが胸元に手を突っ込み懐中時計を引っ張り上げ時間を確認する。

「・・・・・・・・レイズ」

その顔を若干青くしながらカリーナが最も信頼する男に声をかけた。

「まさか・・・」

その意図を汲んでしまったレイズもその顔を同様に青く染めた。

「うん、今が午後1時」

甲板では先ほど以上の大きな悲鳴が上がったのは言うまでもない。

「(にしても遅えな海軍の連絡員は、こんなところで待ち合わせなんて馬鹿だろう)」  
噴水の縁に座り考え事をしている男。

彼の名は“シュライヤ・バスクード”、ガープの呼びかけに答えた賞金稼ぎの一人である。

そんな彼の周囲には300人を超える厳つい男たちが手に手に武器を持って集まっていた。

「おいおい、なんで“こんなところ”に“賞金稼ぎハイエナ”がいるんだよ」

いかにもガラの悪く、チンピラ風な男がシュライヤに声をかけてきた。

一味の中で最も“速い”レイズが一番の危険地帯であり、一番遠い中央にある噴

水広場へと翔けていた。

エース同様に六式を習い、移動業である「剃」と「月歩」を体得したレイズは空をまさに疾風の如く翔けていた。

「(あのクソジジイ、いつか絶対にゼツタイに・・・諦めよ)」

エースからもうどうにもならないと称される「歩く理不尽」に対して諦めることを選んだレイズは、能力も掛け合わせた月歩「無色の翼」エア・アキレスで目的地へと急いでいた。

あと少しで目的地が目視できるところまで来たところまで来たところレイズの耳にはつきりとした戦闘音が聞こえて来た。

「海賊島で賞金稼ぎを見つけたら、"そう"なるわな」

300人を越える海賊に囲まれてしまったシュライヤだったが、その思考の大半は今回の仕事のことに占められていた。

「(やっとあのクズの情報をつかんだんだ。どんなこととしても見失うわけにはいかねえな)」

思い出されるのは流されながらも必死にこちらへと手を伸ばし助けを求める妹の

顔。

そして、自分の故郷を滅ぼしたクズの笑い声。

シュライヤの心はドロドロと煮えたぎった憎悪でいっぱいだった。

端から見れば心此処に有らずと云うのがはつきりと見てとれるシュライヤに対して声を掛けた男はしびれを切らした。

「さっさと答えやがれ。オレたちはあの“將軍” ガスパード様の一味なんだぜ」

その瞬間、シュライヤの周りにいた数人の海賊が宙を舞っていた。

「そうかそうか、手前ら” あいつ” の一味か。なら」

―ぶち殺しても問題ないよな?―

広場へと近づくとつれて人が空へと舞い上がる姿がレイズの目に映るようになってきた。  
た。

そんな奇妙な光景に少し好奇心が疼いたレイズは自分も気が付かないレベルで速度を落としていた。

その瞬間、レイズに向けて大砲の弾が飛んできたのだった。



そして、レイズが風を纏ったのと同時に大爆発を起こしたのだった。

ガープのいい加減さに多少イラついていたレイズ。

普段は子供っぽいところが多々目立つエースと体が急成長しているがまだまだ子供のカリーナが一緒にいるので抑えているのだが、レイズは「相手に右の頬を叩かれたら、その相手を往復ビンタし、フラついたところでトドメを刺す」過激的半〇スタイルな男であった。

そして、現在「歩く理不尽」<sup>モンキーD・ガープ</sup>によって受けたストレスにより、普段はナリを潜めている報復主義な一面がちょうどいい言い訳を見つけて顔を出したのであった。

見た者を虜にするような笑みを浮かべたレイズは空中にて姿勢を保てる最低限の風を残し、残りの纏っていた風を広域に拡げ、自身の最大干渉可能領域である半径5 kmの 대기へと能力を伝播させていった。

そして、懐から扇を取り出すと干渉を受けた風を扇に纏わせ、圧縮し始めた。扇を核にし圧縮された風は長刀を思わせる外観となりレイズの右手に現れた。

その風の刀を恰も居合いの如く構え広場の密集地帯に狙いを定めたレイズ。

次の瞬間、居合いのように風の刀を振り抜いた。

すると、刀の形状をしていた風は巨大な真空刃となり密集地帯へと撃ち込まれ、砂煙を上げて大地を抉り取ったのだった。

ゼフィロス・アーク  
「西風の阿」

その惨状を上空から見ながら、眩かれた声色には何処か晴れ晴れとした気配があった。

周辺の雑魚を手を変え武器を変え吹き飛ばしていくシュライヤ。

その数が50人を越えた時だった。

「舐めやがってこの野郎、これ”を見てもまだそんな態度でいられるか？」

先ほどシュライヤに声をかけた男がバカみたいにデカイ大砲を持ち出してきた。

「おいおい、品がねえな」

「しゃらくせえ、食らいやがれ」

発射された大型の弾はシュライヤを目掛けて飛んできた。

誰しもがシュライヤの終わりを疑わなかった。

すると、シュライヤは自分の側に落ちていたスコップを蹴りあげると逆手で構

え、スコップの緩やかなカーブと体捌きで上空へと大砲の弾を打ち上げた。

「「「「ええー」」」」」

その光景を目撃してしまった海賊たちは一斉に驚きの声をあげていた。

パツと見細身のシュライヤが直径が5mは有ろう砲弾を上空へと打ち上げてしまったのだから仕方ないだろう。

数秒とたたずに爆発音が聴こえ、シュライヤも安心し上空を見上げた次の瞬間、シュライヤは自分へと降ってくる巨大な刀を見た。

「おいおいおいおい、洒落にならねえぞ」

そう呟くや否や、シュライヤは走り出した。

少しでも、あの刀から逃げるために。

その咄嗟の判断がシュライヤの命を救った。

刀が地面に触れた瞬間、シュライヤはあまりの風圧に吹き飛ばされ、民家へと吹き飛ばされた。

「ゼフィロス・アート」

誰かの呟きをシュライヤは確かに聞いた。

シュライヤを囲んでいた海賊たちは先程の数十秒に起こった出来事に我が目を疑っていた。

すると、広場の反対側に何者かが着地する音が聞こえた。

振り向くとそこには、笑顔を顔に張り付けた優男（レイズ）が扇を開いたり閉じたりしながら此方にゆっくりと歩いていった。

突如現れた男に気を取られていると、崩壊した家から瓦礫をどける音が聴こえ、シュライヤがそこから現れた。

帽子で顔は見えないのが逆に不気味な気がした。

ふと、シュライヤとレイズの視線が交差した。

すると、突如準備体操を始めるシュライヤ。

かたや、身体中の関節を鳴らし始めるレイズ。

一通りの動作を終え、再び視線が交差したその時だった。

「「てめえ（お前）か、やりやがったのは？」」

数秒の静寂が訪れた。

「上等だ……！」

その声と共に二人は駆け出し、進行上の邪魔者たちを吹き飛ばしながら近づいていった。

そして、冒頭に戻るのだった。

「で、遅れた理由は？」

すべての海賊（多少のとはっちりを含む）をなぎ倒し、無事だった噴水に腰掛け、互いに休憩をとり始めたレイズとシュライヤ。

ちゃっかりと飲み物を互いに拝借してきてるあたり抜け目がない。

「ガープ中將が原因」

その一言で、何となく察してしまったシュライヤは黙るために拝借してきたワインを呷る。

「しかし、いや。相手を知ればお前が出てくるのは当たり前かシュライヤ」

レイズもブドウジュースを呷るとシュライヤが今回の作戦に参加した理由に納得を示した。

「あいつは、あいつだけは、オレが手を下す」

思い詰めたような、濁りきった目をしながら呟くシュライヤをしり目にレイズは周りの気絶した海賊達から財布を抜き取っていた。

「ま、暫くは厄介になるぜ風迅」

「レイズで良いよ。ま、よろしくなシュライヤ」

---

アンケート終了。

王女の人氣がスゴいのか、エースの人氣がスゴいのか。

## Dに集え／その為の重要な寄り道

遅くなり申し訳ありません。

感想はいつもありがたく拝読させていただいております。

これからも拙い物書きとその作品を宜しくお願い致します。

レイズとシュライヤの大喧嘩が始まったのと同時刻。

「ありあ、アタシもレイズと一緒に行きたかったなあ」

頬を膨らましブウブウと文句を言いながら、空を歩くのはカリーナ。

レイズとの時間を長く取るために“荊”と“月歩”を習得した。

「速さの問題なら仕方ないだろ、此方も重要なんだからな」

方や“指銃”と“鉄塊”を習得しているエース。

中々移動補助系の技の習得が上手くいかず、今も“荊”習得に向けて動作を意識した歩き方を実践している。

そんな二人は海賊島の東の高台へと歩いて向かっていた。

「にしても、楽しみだな”銀獣”ってどんな奴なんだろう」

エースはまだ見ぬ噂の凄腕剣士に期待を膨らませているようだった。

一人の男が高台で座禪を組んでいた。

左手で刀の柄を握り、目を閉じ意識を集中させているその姿は刀を通じて世界と語り合っているようであった。

男は座禪を解き、腰に刀を差し込み立ち上がると左手で合掌の所作を行った。

次いで礼をし、腰の刀を徐に握る。

次の瞬間、男の左手には刀が握られており、その姿は居合い斬りの如く刀を振りぬいた姿をしていた。

「やはり、何か違う。一体何が違うんだ」

銀髪の剣士”サガ”。

彼は迷いの中にないたのであった。

サガには二人の幼馴染がいる。



一人はサガが通っていた道場の娘で、現在は海軍に仕官して着実に腕を上げていく“くいな”。

もう一人はサガと同じく賞金稼ぎをしながら剣士として修行の旅をしている“ゾロ”。

「正義の剣」を極めることを目標としているサガとゾロは旅立つ日に師匠から譲り受けた刀と互いに渡しあった短刀を今も大切に持っている。

サガとゾロは武者修行の旅の途中悲劇が起きた。

二人で海賊船を襲った際、ゾロを庇って右腕の握力が極端に弱くなってしまい、サガは満足に刀を握れなくなってしまった。

サガを幼馴染二人は心配していたが、サガは気丈に振舞うことで二人の心配を払拭しようと今まで以上に刀の修行に邁進するようになっていった。

名を上げていくサガ。

しかし、嘗ての自分の通りに動かせない身体にいつしか迷いが生じ、このところ満足が行く刀を振るえていないのであった。

「ねえ、エースは『自分の成長』について考えることはないの」

道の半ばでカリリーナは最近のエースの成長具合について話をしてきた。

「あん、どうということだ？」

『刺』に至るための歩行訓練を一旦辞め、普通に歩いているエース。

何事もやりすぎは良くないというレイズの教育方針が馴染んでいる証拠であった。

「だって、エースの目標ってレイズと肩並べて戦えるようになることなんでしょ？  
今だって十分に肩並べて戦えてると思うんだけど、そこんとこどうなのよ」

カリリーナから見て二人は本当に息があっており、エースの死角をレイズが、レイズの死角をエースが、互いに補いながら戦う姿はまるで軽快なダンスを見ているようでもあった。

そんなカリリーナの感想に対してエースの答えは。

「なによ、そのイヤそうな歯痒そうな顔は」

非常に納得していない、そんな顔付きだった。

サガは己の右腕を見ていた。

日常生活を行う上では不便がないが戦うとなった時、途端に不便に感じてしまう。元々左利きだったため、そこまで不便に感じていなかった。

だが、敵の強さが一段上がった時から苦戦を強いられるようになった。

剛剣士であるサガは力でねじ伏せる戦いを好んだ。

しかし、右腕が戦いにおいて不自由になってからは自慢の剛剣が振るえなくなり、何時しか迷いの中に陥ってしまったのである。

「・・・なんで、オレなんだ」

蓋をしたはずの黒く濁った気持ちの悪い何かサガの奥底から溢れだしてきた。「オレは、なんであの時ゾロを助けようとしたんだ。なんであの賞金首を狙ったんだ。何でだ、なんでだなんでだナンデダナンデダ」

溢れだしてきた何かに突き動かされるように背面へと刀を振るうサガ。

一切答えのない自問自答はただサガの心を蝕んでいくだけだった。

「誰だ、ちきしょうが。危ねえだろ」

そんな、誰かの怒声が響いたのはサガが刀を振り抜いた数秒あとだった。

「あのな、カリーナ。レイズは風使いなんだぜ」

ため息と同時にエースの口から漏れた言葉は仲間内では周知の事実であった。

「周辺の空気の流れを掌握してから戦闘に移るような怪物が隙を晒すわけないだろ。あれはオレが反応出来るギリギリを敢えて見逃すことでオレの気配察知力を上げているんだよ」

そう言うのと不貞腐れたかのように頬を膨らますエース。

「実際、ウチの船で一番強いのはまず間違いないけどレイズなんだ。そんな奴がオレに期待をかけている、そう聞けば聞えが良いだろうけどな、オレは“対等”でいたいんだよ」

例えレイズにその様なつもりがなくなるとも、エースにとってレイズは未だに先を歩く存在だった。

しかし、子供の駄々のように思える自分の我儘とも言えるプライドのようなそれは、今のエースの原動力になっているのも事実だった。

「(男ってバカねえ)」

そんな内心の苦笑をおくびにださずカーリーナはエースに微笑んでいた。

その時、レイズに無理矢理鍛えられた生存本能が二人に警鐘をならした。

カーリーナは上空へ、エースは仰け反ることで“何か”を避けることに成功した。

カーリーナが無事着地し、エースが体勢を戻し一緒に振り向くとそこには、横一文字に斬り込みが入った岩壁があった。

二人が避けるのが遅ければ確実に頭と首が別れている位置だった。

「誰だ、ちきしようが。危ねえだろ」

誰かの怒声が聞こえサガが振り向くとそこにはテンガロンハットを被った青年と些か肌の露出に目がいきそうな少女がいた。

「すまない、人が来ていることに気がつかなかった」

先程までの“黒い何か”を押さえ込み謝罪するサガ。

「お前か、まったく気を付けろよな」

そんなサガに些か違和感を感じるエース。

「遅くなって申し訳有りません。“銀獣”サガさんでよろしいですか」

一瞬で猫をかぶるカーリーナ、思考型の彼女が話を進めることにしていた。

「ああ、今回は声をかけてくれて恩に着る」

「いえいえ、私達も『雇われた側』の人間です。諸事情で今回お迎えに上がった次第でして、依頼者がズボラでご迷惑をお掛けしました」

互いに頭を下げあうサガとカーリーナ。

その様子を見ながらエースは何やら考え事をしていた。

「それじゃ、『船』に行きま『なあ、あんた『何』に迷ってるんだ」

カーリーナの先導を遮り発せられたエースの言葉に思わず動きが止まるサガ。

「エース、何言ってるの」

「こいつは確かに強い。だけどさっきの一撃にも其処までの迫力がなかった。今回、命を預けあう者としてオレはそれが知りたいんだ」

エースから発せられた言葉に思わずサガを見てしまったカーリーナ。

一方のサガは何処か苛立ちを押さえるように頭を右手で押さえながエースへと視線を移す。

そこには、先程までのヘラヘラしていた青年は存在しておらず、『覚悟』を背負っ

た一人の男が立っていた。

なぜかこの時サガは目の前の青年との付き合いが長くなるそんな確信を得ていた。

そして、サガは己のこれ迄とその心に巣くう黒い何かについて語った。

「「バックカじゃねえの」」

それを聞いたエースとカーリーナの返答は一句違わず同じものだった。

「え、いや、オレは真面目にだな」「真面目そさがバカれなんじゃねえのかっていってんだよ」

そこには、サガを蔑んだように見つめるエースが仁王立ちしていた。

「いいか、そんなこと言い出したらオレなんかなレイズに対して後ろめたさしかないんだよ」

何かのタガが外れたかのようにエースが捲し立てていた。

「ある時は、戦闘中にオレのせいで怪我させても笑って「大事にならなくて良かったな」って言って赦してくれるし、ある時はオレが原因で喧嘩になったのにその相手との仲裁を買ってくれるし、ある時はその日のおかずを味見と称して食いつくし

でも拳骨で赦してくれるし、泥棒が入ったって言って皆の金庫から少しばかり借りてもばれてなかったり「ほう、あれはお前かエース」

エースが後ろを（震えながら）振り向くとそこには、菩薩も真っ青な笑顔の漆黒の闇を背負ったレイズと、そんなレイズに恐れおののくシュライヤがいた。

エースの悲鳴とレイズの怒声とシュライヤの笑い声をBGMにカーリーナがあとを引き継いだ様に喋りだした。

「要約すると、あたし達は不完全で当たり前なのよ」

「不完全が当たり前？」

カーリーナの発した意味不明な言葉にサガは固まっていた。

「レイズ、今あそこでとてつもない笑顔でエースをしばいている人ね、あの人もあたし達の中では最強だろうけどね、能力者だから海に落とされたらひとたまりもないの」



カリリーナの発言に顔を横にし、レイズと呼ばれた男を確認すると、どこから取り出したのかロープでエースを宙吊りにしてお小言に移行していた。

「だから、アタシもエースもレイズと肩並べられる様に強くなって、少しでもレイズが楽になるように頑張ってるの」

そう言いきったカリリーナの横顔は年不相応に艶を帯びた女性の顔をしていた。

そして、カリリーナは笑顔のまま争乱の中心へと歩いていった。

その時、唐突にサガの中で何か弾けた気がした。

それは、目の前の少女に恋をしたわけではない。

ただ、自分の疑問の答えへの道が見えた気がしたからであった。

「(……、たまには寄り道も良いかもしれないな)」

そして、サガもまた四人を追うようにして歩いていった。

エース、レイズ、カリリーナ、シュライヤ、サガ。

5人の初めての航海はこうして始まったのだった。

季節の変わり目、皆様も体調にだけは気をつけてお過ごしください。

## D に集え／衝撃の出会い

お疲れ様です。

パソコンが死んだため、スマホとマンガ喫茶で書いています。

更新速度がかなり遅くなりますがご留意ください。

観光地も兼ねた海賊島。

そんな場所にあるとある酒場にて5人の若者が食事をしていた。

「つかあゝ、たまに食う酒場の飯は旨いな」

特徴的な帽子を首から後ろに下げひたすらに食事をつつ込む青年<sup>エース</sup>。

「おい、エース。今オレのエビフライ盗ったろ」

目を離れた隙に皿に乗っていたメインをかつさらわれ、立ち上がる青年<sup>シュライヤ</sup>。

「黙って食事も出来んのかお前らは」

そんな光景を呆れたように見ながら、追加で注文した酒を楽しんでいる男性<sup>サガ</sup>。

「♪♪♪♪」

鼻歌を口ずさみながら愛しい人が淹れてくれた珈琲に舌鼓を打っている少女。カリリーナ

「・・・はあ」

そんな中、ただ一人手帳とにらめっこしては景気悪そうな顔をして溜め息をついている男性。レイズ

「どうしたのレイズ？何か問題でも？」

極力相手を刺激しない声色でレイズの横の席をもぎ取ったカリリーナが問いかける。

なお、丸テーブルなので席順も何も本来はないはずだがカリリーナが先導する形でいつも席順が決められていた。

「ああ、金が底ついた」

「「「はい？」」」」

今月は元々出費が重なりに重なった。

止めにこの島に来ての爆買い。

金がないんだよと言う状況になった。

「よし、エースを売ろう（労働力的な意味で）（シュライヤ）」

「仕方ない、シュライヤに稼がせよう（軽業師的に）（サガ）」

「頑張ってサガ（ヤのつく自由業みたいな）（カーリーナ）」

「カーリーナ済まない（ホステスの意味で）（エース）」

「「「ふざけんなよ、コラ」」」

「お前ら仲良いな」

4 人に注目が集まるほどに口喧嘩が加熱していくなか、突如見知らぬ男性が話しかけてきた。

「あんら〜、其処にいるのは、グレイちゃん」じゃな〜い」

「ん、この声は」

レイズが後を振り向くとそこにはバレリーナを思わせる見事な姿勢をキープした大柄なオカマが笑顔で回転していた。

「グサッチャン、久しぶり」

「おひさしぶ〜りねい、あちしかったらビックリし過ぎて思わず二度見しちゃったじゃないのよう。「バレエ拳法」あの初夏の夜の二度見」だったわよう」

キャラが濃すぎるオカマの登場に誰しもが言葉を失っていたところに透き通るような声が聞こえてきた。

「あら、"Mr. 3"。知り合いでいいの？」

「あらヤダ、"サンデイ"ちゃん。あちししたら久方ぶりに会ったダチに興奮しちゃっておいでっちゃったかしら」

キャラの濃いオカマの後ろから現れたのは、健康的に日焼けした肌とエキゾチックな色気を漂わせる美女だった。

「あれ、サツちゃん一匹狼じゃなかったっけ？」

「んがっははははは、じょくだんじゃないわよう。あちし今就活中なのよう。サンデイちゃんはあちし"達"の上司なのよう」

レイズと話す大柄なオカマに興味がいってしまっていたが、後ろから現れた美女にレイズ以外の男は見惚れていた。

そして、"彼女"の存在に気が付いたレイズは一瞬だけ驚きの表情をのぞかせるが、誰にも気づかれることなく普段の笑顔を顔に張り付けた。

「なんだよ、レイズのダチか立ち話もなんだから良かったら座れよ」

エースの言葉を受けてレイズのダチを自称するオカマと女性は笑顔で席に着いた。

「ちょっとレイズ、このオカマと女は誰よ」

途中だった家計簿を記載し終えたのか懐に仕舞うのを見計らいレイズに詰め寄るカリーナ。

自分の知らない女をレイズが知っている気配がしたのか少し苛立ちを隠せないでいる。

「こっちのあやふやな存在は“プリマバトラ”の二つ名で知られる賞金稼ぎ”白鳥のベンサム”だ」

「よろしくねい」

バチコンと聞こえてきそうな勢いでウィンクする謎存在に若干腰が引けているカリーナ。

「そんなもって、こちらはサンディちゃん。あちしの今の職場の上司なのよう」

「うふふ、仲良くしましょう」

「はい、喜んで」

アホ二匹（エースとシュライヤ）は本能レベルで返事を返していた。

「それにしちも、レイちゃんたら難しそうな顔して、一体全体どうしたっていうの」

「ああ、実は・・・」

レイズはベンサムに今の状況を伝えた。

賞金稼ぎ5人で旅をしていること。

現状金欠であることも包み隠さずに。

「それだったら、あちしに任せなさい」

「ちよっと、Mr・3」

サンディを名乗る女性が慌てて黙らそうとするもテンションが高く上りきったベンサムには間に合わなかった。

「レイちゃんとそのお仲間達。あちし達と一緒に“DEAD END RACE”に出ましよう」

「「「「（よっしゃ、釣れた）」」」」



「居場所が解らないたあ、どうということだジジイ」

シユライヤとサガを諸悪の根源へと連れ帰り、これからの話となった時だった。ガープ中将から今回の標的であるガスパーデの居場所が解らないという事実が告げられた。

「どうということも何も、今回奴がわしらの動きに気付いて、DEAD END RA CE」の開催地までの道のりを複雑化させよった。

何とか、開催地である島までは解ったがそこから先が一切解らんのだ」

「恐らく何らかの割符のようなものが存在していると推測されますが、こちらでは場所までしか捜査することが限界でした」

「なるほど、そこでオレ達が必要になったわけだ」  
賞金稼ぎ

「しかし、そこからどうしようというのだ。まさか我々に海賊のフリをしろというわけではあるまいな」

ガープとシェパードの説明で事情を察したレイズ。

レイズ同様に事情を理解したサガが刀に手をかけながら手立てを聞こうとする。それをシエパードが片手をあげて待ったをかける。

「そこまでしなくても構わない、レースは何でも売りが売りとなっている」

「となると、中には『同盟』を組もうと画策する奴らが出てきても不思議じゃないな」

「そして、そういった輩は自分達も何らかの焦りに追われている、となれば」

「そいつらを釣り上げてレースに参加すれば良いってことだな」

「??????」

「エースにはあとで教えてあげるから座ってようね」

シエパードの発言にシユライヤ、サガ、レイズは瞬時に当たりをつけた。

エースは義弟が困ったときのよ様な顔をしていたがカーリーナが確りと教え込んだ。  
だ。

「(当初の予定とだいぶ違ったが良しとしよう)エースどうする」

自身の内心などおくびも出さずにエースへと声をかけるレイズ。

全員の視線が必然的にエースへと注がれる。

「レイズのダチなんだろう、宜しく頼むぜ」

腹を決めたエースはベンサムに握手をしようとして手を差し出すが、それはベンサムによって遮られた。

「何をすつとぼけたこと言っているのよう。ダチとそのダチが困っていたら手を差し伸べるのは、男の道を逸れたとしても、女の道を逸れたとしても、決して逸れてはならぬ人の道。あんたたちは“レイちゃんのダチ”。つまり、あちしにとつてもダチ”なのよう」

その言葉に衝撃を受けたような顔になるエースとシュライヤ。

「お、オメエ」

エースの声が震える中、エースとシュライヤが勢いよく立ち上がる。

「良い奴だな」

「にん！」

次の瞬間、3人は肩を組んでラインダンス宜しく踊り始めた。

「「ジョーダンじゃないわよ、ジョーダンじゃないわよ、ジョーダンじゃないわよ、

「ほほほほほほう」

まるでずっと一緒に育ってきた親友のようなその姿に知らず知らずの内に回りも巻き込み、大騒ぎの大宴会となっていった。

“DEAD END RACE” まであと3日。

---

今回二人を出した理由ですか？

好きなキャラだから絡みたかっただけです。

## Dに集え／其々の事情

私の悪い癖が出そうな今日この頃。

酒場を後にし、其々の宿へと戻っていく7人。

「そりじゃ〜いくわよう、  
My Friends」

「おう、サツちゃん！」

「夜はまだまだこれからだぜ」

ベンサム、エース、シユライヤは酒場を出た後も途中まで肩を組んで大騒ぎだった。

「あー、もう3人ともいい加減にしてよ」

「たく、何か妙に波長があっちまっているな」

そんな3人が倒れないようにワタワタとサポートしているカリーナとサガ。

そんな5人を後ろから微笑ましそうに眺めながら歩くレイズとサンデイ。

「サツちゃんが就活とは意外だな」

「あら、そうかしら？人は大事な何かのためなら、自分の良心も押し殺せてしま  
うものよ」

そう、怪しく微笑むサンデイ。

隣を歩くレイズは願掛けで伸ばし始めた銀髪を手で解かしながら、空に輝く月を  
見上げた。

「それじゃ、あんたを突き動かすその『大事な何か』の正体は教えてくれるのかな」  
そう言ったレイズの顔には人好きするような笑顔が浮かんでいた。

—————

「あんらゝ、サンデイちゃん何か良いこと有ったのかしら？」

宿として使用している高級ホテルでシャワーを浴びたベンサムとサンデイは今後  
のことについて計画を練っていた。

「良いかしら、Mr・3。今回の貴方の昇級任務は覚えているかしら？」

「もちろんよう、「將軍」ガスパーデの暗殺」なんて任務、あちしに掛かれば朝飯前なのよう」

言動こそハイテンションだが、シャワーを浴びた体で踊ることはせず、机に置かれたシャンパンへと優雅に手を出すベンサム。

「なら、なぜ「彼ら」を誘ったのかしら」

そう発したサンディの顔には何の表情も無かった。

まるで仮面のようなその顔にはベンサムは既視感を覚えた。

今日久方ぶりに会った友人も昔そんな顔をしてた。

世界中すべてが敵である、そう決めつけた人間のする顔だった。

ベンサムは自分が周囲から見て奇異な存在であることを自覚している。

それでも、今の自分を変える気はない。

自分を偽ることはしないと憧れの人の生きざまから学んだからだ。

「簡単な事よ、サンディちゃん」

—————

港に置かれた真新しい船。

エースたちが所有する「ジャック・ポット号」には現在とてつもない寒気が襲っていた。

「で、レイズは『あの女』と何をお喋りしていたの」

何故かダイニングエリアのフローリングに正座させられたレイズ。

目の前にはそれはそれは見惚れる程に愛らしい笑みを浮かべたカーリーナが、背後にブリザードを背負って立っていた。

なお、エース・シユライヤ・サガはソファーを防壁にしてその様子を伺っていた。

「カーリーナ、何を怒って「怒ってないよ」

レイズの言葉が終わる前に笑顔が更に深まった顔でレイズに顔を近づけるカーリーナ。

「いや、おこっ「怒ってないよ」

「いや、お「怒ってないよ」



「けど「怒ってないよ」

「で「怒ってないよ」

「怒ッテナイヨ」

徐々に顔と言葉の距離が近づいていく二人を普段なら嘸し立てるエースとシユライヤだか、今は涙目でソファアの影から出てこようとしなかった。

その時、レイズとサガの目があった。

「(助けて、サガ)」「(無理)」

言葉を発せずともその時、二人の意志は確かに通じあった。

「……で、あの女に何を探りいれてたの」

—————

「そう、本当に簡単な事よ。だって“風死ふうしのレイズ”が心の底から笑っていたからよ」

“風死”。

レイズが政府主導で参加した大虐殺「人拐い村殲滅作戦」において作戦中に付け

られた異名であった。

能力を“わざと”暴走させ、数多の風の刃を無慈悲に打ち出して最大人数を“殺害”したレイズに付けられた異名。

ベンサムは今でもあの時に見てしまった光景を忘れられずにいた。

まだまだ子供と言われても納得してしまうような幼さを残したレイズと出会ったのは、政府が用意した上陸船の上だった。

「ああ、暇ようヒ・マ。あちしかったら暇すぎて思わず回っちゃうわ」

まだまだ、自分の拳法に名前を付けず切磋琢磨していたベンサム。

元々しなやかだった体を生かした戦闘法を模索していた彼は経験を積むために戦場を渡り歩いていた。

今回の召集も経験を積むために参加したに過ぎなかった。

何時ものようにクルクル回っていると遠くから何やら音が聞こえてきた。

音のした方に視線を向けるとそこには目を疑う光景が広がっていた。

子供と思わしき人物を中心に死屍累々の地獄絵図が其処にはあった。

ある者は腕があり得ない方向に曲がっていた。

ある者は自分の得物と思われる刀で貫かれていた。

ある者は鋭利な刃物でズタズタに切り裂かれていた。

そして、一際体格に恵まれた男が透明な見えない何かに掴まれているかのように空中に浮いていた。

「わ、悪かった。コレ」は還す、還すから許してくれ」

男は顔をグシャグシャに涙で濡らしながら子供に懇願していた。

ふと、男と対峙していた子供が男に向けて手を翳す。

そして、何かを握り締めるように徐々に手を握り込んでいくと男の悲鳴が大きくなっていた。

よく聞くと悲鳴に混じり男から何か折れる音が聴こえていた。

その音が男の骨であると認識した瞬間ベンサムは子供の手を掴んでいた。

「ちょっと待ちいねい」

ベンサムが手を掴んだことに気が付いた子供は顔をベンサムへと向けた。

その時、硝子玉のようにただ周囲を写すだけの瞳と目があった。

その瞬間、ベンサムを吹雪のような殺意がぶつかってきた。

それは、目の前の子供から発せられていることにベンサムは気付いていた。

「た、助かった」

ベンサムの後ろから先程宙に浮かんでいた男が声をかけてきた。

「いったい全体、な〜にがあったのよう」

一部始終を「見ていた」が確認のために男へと声をかけるベンサム。

すると男は息を吹き返したかのように子供を指差し声を荒げ喋りだした。

「この餓鬼、俺の持つてるこの宝石を奪おうとしやがったんだ。だから、周りの奴等が止めに入ってくれたんだが、この有り様だよ」

ベンサムという後ろ楯を獲た事で強気になる男だが、後ろにいたためベンサムの憤怒の顔を見ることはなかった。

「まあったく、あんた「たち」はあ」

その場で回転し始めたベンサムに警戒心を露にする子供だったが、またしても周囲の予想の斜め上をいく結果が現れた。

「あんたたち、バカをお言いで nothing」

ベンサムは己の回転力のすべてを乗せた蹴りを後ろにいた男に見舞った。  
なお、対峙していた子供は初めて驚きの表情を浮かべていた。

「……、ねえ」

その後、少将ボルサリーノの仲裁により事なきを得た騒動。

騒動以降、子供がベンサムの傍を離れようとしなかった。

そんな子供が突如ベンサムに声をかけてきた。

「あんなら、何かご用」

「なんで、あいつらに味方しなかったの？」

心底不思議そうに聞いてくる子供に対してベンサムは嬉しさを覚えていた。

「簡単なことよう。あーたの目が嘘ついてなかったからよう」

「……ハア、おじさんバカでしょう」

子供から放たれた悪意の塊のような言葉に少なくないダメージを負ったベンサムは甲板にへたりこむと、何処から取り出したハンカチを噛み締めて滝のような涙を流し始めた。

「おじさ、おじさんって、あちしは、あちしは・・・」

そんなベンサムを面白いものを見るような目で見ていた子供。

「おじさん、早死しそうだから、僕がついていてあげる」

そういって子供の顔には年相応の笑顔が浮かんでいた。

「それから、殲滅戦が終るまであちしとレイちゃんはパートナーになったのよう  
顔に少し赤みを帯び、昔を懐かしむベンサムからは普段のエキセントリックな雰  
囲気はなく、そこはかとなく花のような色気が漂っていた。

「だから、久しぶりに会って笑顔だったあの子とそのFriendsに手を貸して  
あげたくなったのよう」

「ふふふ、あなたの過去が聞けるなんて良い夜ね」

サンデイとベンサムの会話はそこで終わった。

街中の喧騒をBGMに二人は無言で酒を楽しんでいた。

「(ま、それ以外にも理由はあるんだけどねい)」

日頃は拙い物書きの作品にお付き合いただきありがとうございます。御座います。パソコンで書いていたせいか、スマホやりにくいのです。





## Dに集え／そして結ばれる手

ああ、今年も終わる。

仕事は持ち越しだけど。

一夜明けてレース開始まで残り2日となった。

再度顔合わせをするためにベンサムとサンディを「ジャック・ポット号」へと招待したエースたち一行。

「サッチャー、サッチャー。今日はレイズが腕によりかけたランチなんだぜ」

我がことのように誇らしく語るエースはデッキに移動されたソファアにてカーリーナが準備したミックスジュースに舌鼓を打っていた。

「あーら、レイちゃんの手料理なんて久しぶりねん。エーちゃん“タコパ”はあるかしら」

いつも以上にハイテンションにクルクルと回るベンサム。

そんな彼の後ろから現れたサンディの手にはバケットが握られていた。

「そちらだけで準備させるのは悪いから私たちも軽食を持ってきたわ」

そう言ってバケットを開けるサンディ。

開けられたバケットをエースが覗き込むとそこには見事に盛り付けられた多種多様なサンドイッチがあった。

「おおー、旨そう。じゃまずは味見を「せんでいいから手伝えエース」

バケットの中身にエースが手を出そうとすると突如後ろから現れたサガに耳を引っ張られてテーブルへと連行されていった。

「あー、悪いな。こちらから招待しておいてまだ準備終わってないんだ」

その光景を見ていたシュライヤはバツが悪そうに頭を掻きながら現れた。

「いえいえ、おかまいnothing。あちしたちはソファーで寛がせてもらおうわ」  
そう言うサンディをエスコートするように先に座らせ自身もソファーへと優雅に着地するベンサム。

「あら、お姉さまに男姉さま。もうすぐ準備できるから先にオードブルでも摘まんでて」

船内から現れたカリーナの手には鮮やかに彩られた多種多様な野菜やフルーツが盛られたクラッカーに乗ったトレイがあった。

「ワインとシャンパンも準備してある。楽しんでくれ」

その後ろから姿を見せたサガの両手にはワインボトルとシャンパンボトルが握られていた。

ここに至り、サンディはある事に気が付いた。

今まで出て来た今回の共同参加者は誰一人敵意が見えないのだ。

昨晚、話した「あの男」も姿を現さないのは自分に配慮したためであるとすぐに理解できた。

この船の上にはサンディに対して一切の敵意がなかったのだった。

「「「サンディの正体？」」」

時は昨晚、カリーナに問い詰められていたレイズはため息とともに自分の行って

いたことを明かしていた。

「そう、何日か前に『賞金首リスト』の整理をしていた時に最近見ない顔を見てね、それで気になっていた時にサッチャンと再会して、後ろから出て来た彼女を思い出してね」

そう言うのと船に戻ってきてから取りに行っていた手配書を持ち出した。

そこには、年端もいかない少女が映し出されていた。

「おそらく、彼女は『ニコ・ロビン』本人だと思う。外見的にもこの子が成長したら彼女になりそうだし」

4人に手配書を渡したレイズは足を崩し近くにあった椅子に座りなおした。

4人には確証はないと言外に言っているがレイズには確証があった。

それは彼の裏技“塗りつぶされた原作の記憶”である。

以前にも記したがレイズは所々抜け落ちた原作知識を持つ転生者である。

原作の大まかな内容は思い出せるのだが、細かい内容については“インクで塗り潰されている”ような感覚で思い出そうとしてもはっきりと思いつけない状況にある。だが、知識を得ることでその“インクで塗り潰されているような箇所”が思い

出されるのである。

そんなレイズは原作のルフィの仲間である“ニコ・ロビンという存在”をなんとなく覚えていたが容姿や能力、彼女の過去といったものに関しては霞がかかったかのように曖昧にしか思い出せなかった。

しかし、酒場でサンディと出会ったことで“手配書の少女”と“現在の姿”という情報が加わり、大まかにではあるが彼女のことを思い出していたのである。

そのことに現実味を帯びさせるためにサンディに話しかけて情報を引き出そうとしたのだが余計な警戒心を植え付ける結果に終わってしまった。

「なるほどな、彼女は“裏社会”じゃ有名だからな、それこそ真偽問わず情報が溢れているがレイズは何か知ってるんだろうな」

ソファアールから出て来たシュライヤは椅子に座りこんだレイズへと視線を移した。復讐の対象であるガスパーデの情報を探すために、一時期は裏社会に身を置いていたシュライヤも“ニコ・ロビン”の情報は多少有していた。

「……は、胸糞悪い話だよ」

そう、レイズにしては珍しく、エースたちがいるにも関わらず嫌悪感を露わにし

た顔で語り始めた。

「オハラの子劇」その真実について。

テーブルのところ狭しと並べられた料理の数々。

ビュッフェ形式で並ぶ料理の完成度に思わずロピンは声を失っていた。

隣を見ると Mr・3 が優雅な所作で暴飲暴食を開始していた。

「ちよつとちよつとちよつとジョーダンじゃないわよう。レイちゃん「タコパ」は？タコパが無いじゃないのよう」

常日頃から彼が求める謎の料理「タコパ」。

それを知っていることに戦慄を覚えたロピン。

「サツちゃんや、あれ」はデザートでしょ。未々あるから先に食べきっちゃってよ」

昨晩金がないと言っていたにも関わらずこのおもてなし。

ますます、警戒心を抱くロビンだった。

「にしても、My Friends。あー私たちお金無いんじゃないの？」  
その問いを待っていましたとばかりにエースたちは笑顔を向けた。

「「レイズがやりました」」

「お陰で、もうこの島で賭博は出来ないけどな」

そう、レイズは今日のために昨晚島中の賭博場（表裏の関係無く）の金庫を空に  
してきたのである。

当然、イカサマしてだが誰もいつイカサマが行われたのか理解できなかった為、  
レイズは無事に船に帰ってこれたのだが。

「そんなこと良いからさっさとパーティーしようぜ」

エースのその声を切欠にながらではあるが、宴が始まった。

エースの天性のモノによるのか、レイズが気が付くと当初は輪に加わろうとして  
いなかったロビンもカリナーナの横で笑顔で料理を楽しんでいた。

デザートの準備でレイズが船内に戻った後も楽しそうな声が船上には響いてい  
た。

「それじゃ、ビジネスの話とさうか」

デザートをもって現れたレイズ。

準備されたケーキやフルーツの盛合せ、タコパが机にならび、其々がお茶を飲んだところでレイズのそんな声が響いた。

「此方の条件はレース中の同盟関係の締結。それと、<sup>こ</sup>ジャック・ポット号<sup>船</sup>”で一緒に参加すること。賞金の山分け」

「それと、何か有るんじゃないかしら」

互いに悪い顔をするロビンとレイズ。

周囲はそんな二人に割って入ることもなく、成り行きを見守っていた。

「ガスパーデの首は早い者勝ちでさうよ、<sup>”</sup>バロックワークス<sup>”</sup>」

その名前が出た瞬間、明らかにロビンは顔をこわばらせてしまった。

二人のやり取りをみていたベンサムは顔がにやけるのを止めることはなかった。

「<sup>”</sup>コレ<sup>”</sup>よ。コレがあるからレイちゃん怖いのよ」

レイズの裏技を知らない者にとってレイズの知識量は脅威でしかなかった。



僅か5分前は知らなかったはずの情報は何処からか引き出し考察し答えを導き出してしまふ。

わずかな時間であったが、バディだったからこそ理解してしまったその異常さ。だからこそ、ベンサムはレイズを仲間にしようと共闘を申し込んだのだ。

“敵”とならないために。

「・・・何のことかしら、私たちはそんな組織に属していないわよ」

顔の強張りに気が付いたのか笑顔を張り付けたロビンはレイズを正面に見据えて“ボス”との約定のために嘘をつくことを選んだ。

「バロックワークス、徹底した秘密主義が採られており、社員たちは社長の正体はもちろん、仲間の素性も一切知らされず、互いをコードネームで呼び合う「秘密犯罪会社」。

基本的に男女ペアで行動し、男性は数字が若いほどに実力者とされ、パートナーの女性は曜日や祝日、記念日などからコードネームがつけられる」

レイズは顔を下を向いた姿勢のまま語られていく組織の全容に背筋に冷たい何か走るのを覚えるロビン。

徐にあげられたレイズの顔を見たとき、ロビンは久しぶりに困惑を覚えた。

目の前の青年はなぜかとても悲しそうだったのだ。

その悲しみが何から来ているのかロビンには解らなかった。

今まで自分の存在を排除され続ける人生だった彼女に向けられてきた感情は憎悪、嫌悪といった感情が大半だった。

なのに目の前の青年はなぜか悲しみの感情を自分に向けてきている。

理解が追いつかないロビンにレイズは彼女にしか聞こえないであろう声で告げる。

「信じるとは言わない、あなたの半生は人間の汚いモノで塗りつぶされてしまっているから。打算でもいい、オレを信じなくてもいい。利用してくれてもかまわない」

そうポツポツとつぶやかれる言葉が不思議とロビンの心に沁み込んでいった。

「だけど、忘れないでほしい。あなたを愛してくれる人は必ずいるから」

そう呟くとレイズはロビンの後ろにいる仲間に目をやる。

その奥にただ無言を貫き、真剣な眼差しでこちらを見てくるエースを見て心を決めるようにレイズはロビンに語る。

「オレは死ぬ間際にただ一人の存在が“愛してくれて、ありがとう”なんて言わせる世界を嫌悪する、オレは“世界のための小さな犠牲”を軽蔑する」

レイズの言葉に宿る熱が徐々に上がっていくのを船上誰もが気が付いていた。

「だから、心を殺してまでやり遂げようとするサッチャーンもあなたも尊敬している。その踏み台程度でいいから」

レイズの頬に涙が伝うのをロビンは見とれてしまっていた。

「少しの間だけ信じてくれ、オレじゃなくてエースたちを」

気が付くと空は夕暮れに染まっていた。

「・・・わかったわ、あなたはやっぱり信じられないけど」

ロビンは後に語っている。

「あなた“達”は信じてあげる」

あの時、久しぶりに心から笑顔になれたと。

年末はいいなあ。

死に物狂いで終わらせたけど。

## その果てに掴み取れ

彼王日間ランキング61位

友人に自慢したら今までもちよくちよくランキング入りしていたという驚愕の事実が発覚。

私の作品にこのような評価を頂き誠にありがとうございます。

「よっしゃ、行くぜ野郎共」

紆余曲折はあったが、チームを組むこととなり参加を申し込みに全員で出会った酒場へと歩いていった。

先頭を歩くエースは満面の笑顔を浮かべて人混みの中を歩いていた。

「ねえ、エース分かりやす過ぎない」

最後尾を、歩きにくそうに“レイズに捕まりながら歩くカーリーナ。

「仕方ないよ、一時とはいえ『海賊』を名乗れるんだから。あとカーリーナはいい加減に離れてくれると嬉しいんだけどなあ」

「誰かさんのせいでまだ何か挟まっている感じがするの」

「海楼石の手錠使って拘束した上で跨がってきたのはどっちだ」

最後尾で話すそんなレイズとカーリーナを尻目にその前を歩くのはサガとロビン。

「あら、彼食<sup>レイズ</sup>べられちゃったの」

「ああ、昨晚にな。カーリーナの我慢が限界を越えたらしい」

笑顔で核心をついてくるロビンと頭を押さえながらその横を歩くサガ。

「しかし、サンディよ」

「何かしら？」

「オレから見たら、お前の笑顔も大分凄味が出ているがな」

サガの指摘を受けて思わず自分の両頬を押さえるようにムニムニと揉んでいるロビン。

同盟を組んだあの日、船に乗り移り生活を共にしていた。

昨晚は、面白半分でカーリーナを焚き付けたロビンだったが何故か今彼女の心を占

める感情は嫉妬に近い感情だった。

知略班として組むことになったレイズとはあらゆる手段を考察しており、一緒にいる時間が増えていた。

反面、時間が取られたエースとカリーナは誰が見ても不満な顔をしており、二人が一緒に買い物に出掛けた時などカリーナは「あの時」の笑顔で周囲を威嚇していた。

それを面白がったロビンはカリーナを焚き付けて、ナニも出来ずに撃沈するだろうと悪い笑顔を浮かべていた。

しかし、翌朝現れた二人はあからさまに事後であった。

その二人を見たロビンはその時から笑顔に凄味があふれでてきていた。

なお、その事についてロビンは認識していなかったようである。

「んがっはははは、サンディちゃんたら「人らしく」なってきたじゃなくい」

「あんた、それも狙いだっただのかい」

エースを前に後二組の会話を聞きながらベンサムとシュライヤは歩いていた。

エースの保護者が手一杯だからだろうか、先頭を行くエースのお守りをもって出

てくれたのである。

「んふ、レイちゃんたら無自覚なんでしようけど人の心の内側に入り込むのが上手だからねい。サンディちゃんったら最近怖い顔ばっかしてるんだから」

「・・・本当に偶然か、あいつとの再会は」

「もちこーす。あちしもそこはびっくらしてるのよう」

戦闘訓練や買い出し、夜番と一緒にあって以降なにかとバディを組んで行動することが多かったベンサムとシュライヤ。

互いに腹に抱えた“何か”を悟らせないように行動しているが、それでも一応の信頼関係を結んでいるようであった。

レイズを通して知り合った二人ではあるが互いに成し遂げたい何かのために邁進する姿勢は共感を覚えたのだろう。

「お、飯屋だ寄ってこうぜ」

「「「「「寄らない、さっさと行く」」」」」

そんな“雰囲気”を感じたエースはいつも以上に自由に振舞い裏通りを歩いていった。



エースは今の雰囲気が大変気に入っていた。

自分が憧れた海賊という名の自由の象徴のように互いが好きなことをやりながらそれでも一つの目標に向かっていている雰囲気が。

ただし、一番後ろで相棒と戯れるカリーナに対しては兄を取られた弟のような変な嫉妬を覚えているが。

酒場につくとロビンを先頭にカウンターへと歩く一同。

「こんにちわ」

「おう、何かようか」

ロビンの挨拶にぶっきらぼうに返す店主。

そんな様子を気にすることなくロビンは胸元から3枚の古い貨幣を取り出した。

「ジャック・ローズをお願いします」

ロビンの言葉と貨幣を確認した店主は拭いていたグラスを棚に戻すと、改めてロビンに振り返る。

「アップル・ジャックの上物が入ったとこだ」

「あら良かった。そうしたら【7人分】よくかき混ぜてショットグラスに注いでちょうだい」

「・・・全員こっちに来い」

店主に顎で示された先には一つのドアがあった。

真つ暗な部屋にエースたち全員が中に入ると店主は徐に明かりをつけた。

そこには所狭しと酒棚があるが明らかに一番奥に場違いな扉があった。

「ここから先はこのランプを持って行きな」

そう言うと店主は壁に架けられていたランプに火をつけエースへと手渡した。

「おう、あんがとな」

満面の笑みでランプを受け取るエースを見て店主の男は驚いた顔をし、何かを考えるようなそぶりを見せた。

「・・・おい、あんちゃん」

「あん、なんだ」

扉を開けようとするエースに対して店主はある言葉を投げかけた。

「何がそんなに楽しいんだ？」

それは何か答えを求めているような声色だった。

「こいつら仲間と冒険が出来る、それが嬉しくて楽しいのさ」

これから起こることを想像しないわけでもないが、エースは満面の笑みを店主へと向けた。

そんなエースを見て、店主の男は少し笑みを浮かべるとどこから取り出したのか煙草を銜え火をつけた。

「こいつは独り言だが、オレは“このレース”の敗北者だ。この島にはそういった輩で溢れていやがる。今回のレース裏でガスパーデが何か企んでいるらしい、何もかも疑ってかかるくらいに覚悟がなきゃ生き残れないと思いな。……ここからは一本道だからよほどの馬鹿じゃなければ迷うことはねえぞ」

「おう、解った」

そうエースは満面の笑みで答えたのだった。

店主の言葉通り、一本道の洞窟を元気よく歩くエース。

腕を振りすぎてランプが飛んでいかないか心配になってしまいうレベルだった。

「レイズ、どうだ」

シュライヤの声にエースも歩みを止め、最後尾を歩くレイズに視線を向ける。

「風を流し続けて探索してるけど問題ないよ」

「そうか、てかその両腕どうにかしろ」

レイズの風の探知網の精度を知る全員が安堵した中、シュライヤのツツコミがレイズへと突き刺さる。

そこには右腕をカリーナが、左腕をロビンに抱きつかれながら彼女たちの負担にならないようゆっくり歩くレイズがいた。

「何よシュライヤ。文句あるの」

「あら、ご免なさい。こんな歩きづらいとは思わなかったの」

カリーナとロビンは悪びれもせず、かといって離れる素振りを見せるどころか、より確りとレイズの腕にしがみつくように腕の力を強めていた。

「落ち着きなさいなシューちゃん」

「騒がれるよりましだろ」

肩にベンサムとサガが労るように優しく手を置かれたシュライヤ。

「いや、羨ましいわけじゃないからな」

その慈愛の目線に込められた言葉を読み取ってしまい、大慌てで否定するが逆に怪しさが増すだけだった。

「おーーーーーい、出口あったぞ」

気が付くと遠くの方でエースがランプを振っている姿があった。

その姿に毒気を抜かれたのか、全員が歩く速度を早めたのだった。

「全員いるな、それじゃ開けるぞ」

エースはそう言うのと簡素な造りのドアを開け放った。

その後には目を疑うような光景が広がっていた。

そこには広大な縦穴が存在しており、島民以上の数の海賊達がひしめき合っていたのである。

「うはーーーー、コレ全員が参加者か」

エースが目を輝かせながら周囲を見渡していると最後尾にいたレイズが話しかけてきた。

「はい、それじゃオレとサンディは受付してくるから皆は“大人しく”座ってご飯楽しんでてね、タダらしいから」

「アタシも行く」

「あらあら、そうしたらこのまま行きましょう」

カリーナの一言に反応したロビンに連行されるように連れていかれたレイズ。

傍目には「両手に花」に見えるだろうが、レイズからしたら色々複雑な状況なのであった。

「それじゃ、受付はレイズ達に任せて、オレ等はメシにしよう」

DEAD END RACE。

エース達の冒険が始まったのである。

---

ジャック・ローズはカクテルの名前です。

本文中の作り方は間違った作り方ですので興味がある方は調べてみてください。

## その果てにつかみ取れ／現れる T

区切りが良いので投稿。

相変わらずこんな感じですがガンバリマス。

---

シュライヤの体から立ち込めるどす黒く染まり濁った殺意。

その目はレイズが時折する硝子玉のようにただただ目の前の映像を景色として脳に映すだけだった。

時間は少し遡る。

夕御飯を誰よりも食べたはずのエースは席につくなりメニューの端から端まで注文し手当たり次第食べ始めていた。

「うお、このペロンチーノ案外旨い」

「おいエース、このマルゲリータも中々いけるぞ」

「んがはははは、シューちゃんあちしのたこ焼き少し食べる？」

「お前らは本当によく食べるな、しかしこのピクルスつまみに良いな」

そんなエースにつられたかのようにシュライヤとベンサムも食事をし始め、その様子に呆れながら樽をジョッキ替わりに酒を飲むサガ。

「まあ、」

「でもな」

「やっぱし」

「だな」

突如食べる手を止めた4人は何かに納得したように空になった皿にフォークを置く。

「[[「レイズ(レイちゃん)のメシ(ご飯)の方が旨い(わねい)！！！！！」]]」

何故か勝ち誇ったような顔をして周囲を見渡す4人だった。

「おいおい、嬉しいこと言ってくれるね」

4人の感想に答えるように返答が聞こえ、その声を待っていましたとばかりに満面の笑顔で振り向くエース。

「遅えぞレイズ」



そこには、湯気たつカップとソーサーを器用に両手で7つ持ち、未だにカリーナ美少女とロビン美少女を侍らしているように見える状態でレイズたちがいたのであった。

「悪かった、途中で絡んでくるアホが多かったからな。淑女のエスコートに時間をかけたんだよ」

そう言うのとエースの隣に座ろうとするレイズだったが、両腕の淑女により強制的に現状のままの位置関係で座らされていた。

「んで、どうだったのよう。早く教えなさいよう」

カリーナから紅茶を受け取ると優雅に一息つけレースの概要を聞くベンサム。

「落ち着いて Mr・3、今話すから」

ロビンに窘められるような形になったが、レースの報告が始まった。

今回の Dead End Race 概要は通常通りの何でもありのハチャメチャレースで、最初にゴールの島についての船が優勝となる。

途中までの航海で妨害戦闘何でもあり、文字通り悪党による悪党のためのレースだった。

ゴールは酒と祭りの島「エントローリ」。

「って訳なんだけど、オレ等のターゲットを考えるとこの状態でなにもしてないとは考えづらいわけで」

「このエターナルポースも何かしらのトラップが仕掛けられていると考えているのよ」

「だから、帰ったらサンディとレイズそれにアタシもアタシも頭使うから出航準備ヨロシクね」

知略班に分けられていたロビンとレイズ。

そこにカーリーナが加わることを本人の口から強く念を押される他4人。

カーリーナの意図を汲み取ったのかその顔は苦笑이었다。

「おうおうおうおう、こんな場所でナニしてんだよオメエは」

レースの話もそこそこに周囲の参加者の確認をしているとあからさまに柄の悪い男たちがエース達の机に近づいてきた。

現状、無用な争いを起こさないようにしていた7人は無視を決め込んだ。

「こんな良い女テメエみてえな優男には勿体ないぜ」

男達にとって最大の不幸は彼らの存在だった。

「やっぱ、オレ等 “ガスパーデ海賊艦隊” のメンツみちやいなや」

先頭にいた男は気が付くと仲間を巻き込み蹴飛ばされていった。

「テメエ等」

レイズが視線を上げるとそこには、自分の対面に座っていた筈のシュライヤが蹴り抜いた形で椅子に立っていた。

「オレの前でその名前出してタダで済むと思うなよ」

その声と共に一団へと襲いかかるシュライヤ。

「少しは自重できんのかあいつは」

レイズが持ってきたコーヒーを飲みながら下の階へと場所を移したシュライヤ無双による喧騒をBGMにサガが呟いた一言はテーブルに残った4人も無意識に首を縦に振っていた。

「でゆーも、シューちゃんからしたら復讐の対象なんだから “あんな状態” になってもしょうがないんじゃない」

「でもね男姉様、一応レース開始まで手を出さないって取り決めたんだから守ら

ないと」

「カリーナの言う通りね。私達はあくまで協力関係なんだから決めたことは守って貰わないと」

「サンデイが正しいとは言わないけど、作戦決めた時に念を押したはずなのにな」

「「「「はあ~~~~~」」」」

5人同時に溜め息をついた時、レイズはある違和感に気がついた。

徐に指差し確認でテーブルに着席している人数を数え、周囲を見渡し頭を捻るように奇妙な行動をしていた。

「ところでき」

意を決したようにレイズが4人に話し掛けた。

それと同時に下の階がまた一段と煩くなってきた。

「エースは？」

突然だが、現在彼らのいる席はテラス席のようになっており、目の前をエレベーターのような滑車が上下して上層と下層のやり取りをしているようだった。

その滑車は帆船用の鎖でいったり来たりを行っていた。

レイズ達の目の前にはそんな鎖の一つがある。

「はん、来いや雑魚供が」

下から上がってきているであろう集団をこれでもかと煽りながら上がっていくシュライヤを見送った一同。

「おっしゃー、やったれシュライヤ」

少し遅れてシュライヤに声援を送りながら上がって行くエースを認識してしまった。

「「「なにを煽ってんだ、てかなにをやってんだあのバカ！！！」」」

滑車の頂上、キッチンを兼ねた小型船の船体に上ったシュライヤとエースは端にまるで相手を歯牙にもかけていないようにふざけた態度で座っていた。

「テメエら調子に乗りやがってもう逃げ場はねえぞ」

どう見ても悪人面の小物感丸出しの男が威勢良く吠えている。

そんな様子を意に返すことなくシュライヤとエースは雑談を始めていた。

「ああ、やっちゃまった。絶対にレイズに怒られるわ」

「なっはははは、シュライヤは馬鹿だな」

「いや、煽つてたお前も同罪だからなエース」

一切の緊張感も追い詰められた恐怖すら感じていないように陽気に喋る二人を見て海賊たちはついに我慢の限界に達した。

「行くぞ、お前ら」

先頭集団が駆け出したその時、エースとシュライヤは悪戯が成功したような悪い顔をしていた。

「んの馬鹿どもは」

突如レイズが額を抑えるように立ち上がるとロビンとカリーナを立てさせて後ろへと移動し始めた。

「どうしたのよう、レイちゃん？」

その奇妙な行動に目をぱちくりしているベンサム。

「サッチャン、サガ“ここ”まで来ないと濡れるよ」

レイズがそう言った瞬間上から船が落ちてきたのであった。

「いいかエース、あいつらをバカにするためにこの船を落とそう」

「あん、どういうことだ？」

海賊たちが追いつく前、船体にたどり着いたシュライヤはエースに提案していた。「この船をつるしているロープ、いくら頑丈と言ってもあんな人数が乗ったら落ちちまうだろうな」

「そうだな」

「だからよ”落とす”手伝いをしてやろうぜ」

そう言うのと懐から机に置かれていたナイフを取り出しロープに投げつけ切れ目を入れていくシュライヤ。

「これで船が落ちても”あいつら”が原因になるし何よりバカにできる」

「いいなそれ、のった」

エースも自分たちが落ちないようにロープを準備し、下っ端共が上がってくるのを待っていたのであった。

「あつはははははは、バーカバーカ」

「本当に間抜けじゃねえか」

一番上で大声で相手を小馬鹿にしているエースとシュライヤ。

ひとしきり馬鹿にし終えると近場のテラスへと飛び降りたのだった。

「おい手前ら、ふざけんじゃねえぞ」

「んお」

その時、運良く助かった追い回してきていた海賊の一人がギリギリ助かったのかエースたちにピストルを構えていた。

「なあ、もう諦めろよ」

「そうそう、お前たちじゃオレ達に敵わねえからさ」

エースとシュライヤは息切れすらしておらず、かたや下っ端海賊の男は息も絶え絶え疲労困憊という状態だった。

「ふっざけんよ、オレ達にも意地ってもんがな」

男が最後まで言葉を発しようとした瞬間、エースとシュライヤの間を縫うように槍のような何かが通りすぎた。



次の瞬間、ピストルを構えていた男の体には穴が開いていた。

「騒々しいぞ、手前ら」

その声とともにテラスの奥、暗闇から男が二人現れた。

そして、一人の男を見た瞬間、シュライヤは自分でも抑えきれない殺意に押しつぶされかけた。

「將軍、ガスパーデ」

暗闇の奥から現れた今回の標的にして、シュライヤの殺したい相手は気怠そうに現れたのだった。

---

今年 of 目標

今年中にビビ編に入りたい。



その果てにつかみ取れ／Rであること

皆さん、体には本当に気を付けましょう

最上階のテラスは見るも無残な状態となっていた。

ガスパーデとにらみ合うエース。

ガスパーデの腹心ニードルスの鉄爪と刀で競り合っているサガ。

その光景を欄干に背を預けて眺めているレイズとベンサム。

レイズの傍にある階段から救急箱と濡れタオルを持って駆け上がってくるロビンとカリーナ。

そして、無残にもやられ欄干に吹き飛ばされ傷だらけのシュライヤ。

朦朧とする意識の中、シュライヤは先ほどまでのやり取りを思い出していた。

「お前がガスパーデか」

湯気のようにシュライヤの体から憎悪が立ち上っているようにエースは見えていた。

シュライヤの事情は手を組むと決めた日に聞いていたが、実際目の前でその姿を見るとシュライヤに恐怖だけしかなかった。

一緒に行動するようになり、一緒に馬鹿なこととしてレイズに叱られる。

ご飯時はおかずの取り合いをしてカリーナに殴られる。

サガとの戦闘訓練でポコポコにされ、その間抜け面を互いに見て笑い合う。

そんなイメージとはかけ離れた友の姿にエースは恐怖していた。

「ああ、だったら何だってんだクソ餓鬼」

その言葉に歪な笑みを強めるシュライヤ。

「今ここで死ぬ」

そう叫ぶと手近に落ちていたサーベルを拾い上げ、ガスパーデへと投げつけ、そのまま加速してガスパーデへと迫るシュライヤ。

「おい、待てシュライヤ」

危険を察知したエースに呼び止められるも、今のシュライヤには効果はなかった。

目の前に殺すと決めた復讐の対象がいる。

いつもなら、冷静になれと言う自分がいる。

しかし、この時はシュライヤの思考の全てがガスパーデへと向いてしまっていた。だからこそ、気づけなかった。

「邪魔だ」

「ガッ」

横合いから伸びてきたニードルスの蹴りを。

シュライヤの最高速に達していたスピードに合わせてるように放たれた蹴りは腹部にめり込むように極り、その場へとシュライヤを押し留めた。

全ての衝撃が一点に集中してしまったがゆえに、シュライヤの受けたダメージは想像を絶するものとなっていた。

しかし、シュライヤは倒れこむことはなかった。

それはもしかしたら、シュライヤがこれまで積み重ねてきたモノがそうさせたのかもしれない。

だが、現実はひどく残酷であった。

「邪魔だと言っただろうが」

ニードルスは追撃にとシュライヤへ蹴りを放つと、いともたやすくシュライヤは欄干へ叩きつけられた。

ニードルスが鉄爪を装備し走り出し、意識を朦朧としたシュライヤへと襲い掛かる。

朦朧とする意識の中、シュライヤはその攻撃を避けようとするが体が一切動いてくれなかった。

シュライヤが死を予感した次の瞬間、金属が打ち合う甲高い音が彼の耳に届いたのだった。

「邪魔をするな” 剣士”」

「邪魔させてもらうぜ” 刺青野郎”」

左腕で逆手に抜刀した刀で鉄爪を受け止め、尚且つニードルスのパワーと拮抗しているサガがそこにはいた。

下から登ってきてその惨事を目撃したロビンはカーリーナを伴い治療道具を探しに戻った。

ベンサムとレイズは欄干にもたれ掛かるシュライヤの両脇に陣取り、事の成り行きを見守っているような体勢でいる。

しかし、見る者が見ればいかなる攻撃にも対処できるように迎撃態勢を整えていた。

エースはそんな光景を見ながら久方ぶりに頭に血が上っていく感覚を覚えた。

ゆったりとした足取りでガスパーデへと歩むエース。

その姿を不敵に、傲慢な笑顔を浮かべながら酒を飲み干すガスパーデ。

エースとガスパーデ、二人の間合いがついに重なった。

「ふん、雑魚の集まりかと思っただら中々に骨がありそうな奴らじゃないか。おいニードルス手を引け」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ファン」

ガスパーデの言葉に従うように得物をおさめ目にもとまらぬ速さでガスパーデの右隣に現れるニードルス。

ニードルスが戻ったのを確認すると笑顔を浮かべたまま、エースに話しかけ始めるガスパーデ。

「お前ら、面白え連中だな。今のバカ騒ぎでだいぶ部下が減っちゃったな」  
そう言うと言値踏みするようにエースたちを見回し始める。

次の瞬間、驚くべき言葉が彼の口から放たれた。

「お前ら、オレの部下になれ」

静寂が支配する空間。

その静寂を破ったのはどこからか聞こえてきた笑い声だった。

「ハハハハハハ、エースどうする気だい？」

それは喜劇でも見ているような笑みを浮かべたレイズだった。

そして、言外に決定権をエースに委ねていると言っている物言いだった。

「断る！！！！！」

それは、そのフロアー以外の存在にも響くような大声だった。

「こいつからはオレの嫌いなクズの匂いがする」

エースのその一言を合図にガスパーデ側から複数の殺気が放たれる。



目を凝らすと暗闇に潜むようにニードルスと同等と思える実力者がこちらを見ていた。

「おいおい、やめねえかお前ら」

気だるげに手を上げ部下を制するガスパーデ。

「楽しみはレースまで取っておこうぜ。じゃあな新人共<sup>ルーキーズ</sup>」

シュライヤが覚えていたのはそこまでだった。

そう言って風邪をひいているアホ作者



その果てにつかみ取れ／Lがあるということ

今行っている会社の周辺でここ最近マスクとアルコールティッシュを見なくなり  
ました。

一時の衝動買いや転売目的の方は自重してください。

「結局、目覚まसानかったなシュライヤ」

甲板で仁王立ちをしながらレース開始のファンファーレを待っていた。

あの後、簡易的な治療を行われたシュライヤはジャック・ポット号の私室に運び  
込まれ、ロビンとレイズによって治療が行われた。

数日が経ち、今なおベッドで死んだように眠るシュライヤ。

「体は回復してるはずだよ。あとは心の問題なんだよ」

その後ろでデッキチュアに座りモクテル（ノンアルコールカクテル）を飲むレイ  
ズ。

つい先ほどまでシュライヤの容態を診ていたが、医者でない彼はすでに手は尽くしたと休んでいる。

その隣ではレイズと共に現在までシュライヤの看護をしていたロビンとカリナがレイズの肩を枕に寝ている。

「シュューちゃんにとってガスパーデに勝てなかったことは起きるのを拒否るぐらいにシヨックだったのねん」

「目的がはっきりしていただけに」それが折れた衝撃は相当だったんだろうな」  
出航の準備を終え、レイズの入れたお茶で休憩しているサガとベンサム。

中型船に分類されるジャック・ポット号だが、最低人数で航海ができるように作られている。

3人いれば楽に航海できるように設計された船は今、出航の合図を待っていた。  
「いいんだ、オレはシュライヤが起きるのまってるから」

そう仁王立ちのまま前だけ見据えるエース。  
そんなエースの背をレイズは眩し気に見ていた。

船全体に流した風で船底の倉庫に潜む存在を感知していたが、ぐっすりと眠るそ

の存在に対して起きるまで放置をすると決めた。

そして、風を操り熟睡するロビンとカリーナを横にしブランケットを掛けなおすと徐に立ち上がった。

「シユライヤの様子見てくる、始まったら後は頼むぜ」船長<sup>エース</sup>」

そう一言つけたすと船内へと歩いて行った。

レイズが船内へと消えてから一向に仁王立ちをやめないエース。

「いつまでそうしてるつもりだエース、さっさとこっち来い」

サガに呼ばれ後ろを振り返ったエース。

「ちよっちちよっちエースちゃん。なんなのようその顔」

振り返ったエースの顔はとてつもなくだらけ切った、見るに堪えない顔をしていた。

「デへへへへへへ、オレ“船長”だって」

認められたいと願っていた男に、この時だけとはいえ“船長”と呼ばれたことに嬉しさがあふれ出し、顔だけでなく全身がとろけ切っていた。

「ヴァカなのエースちゃん」

「バカだなエースは」

そんな感想を受けたエースはそれでも顔のニヤケを正せそうになかった。

「……準備は出来てるの」

寝起きにレイズがいないことに不機嫌を隠そうとしないカリーナ。

「大丈夫そうよカリーナ。あとは開幕の合図を待つだけね」

顔は笑顔だが雰囲気は冷たいロビン。

「さあ、レースを楽しもうぜ」

そこには、無邪気に笑うエースがいた。

レイズは船底の倉庫に来ていた。

「お、これだ」

目の前に子供一人が隠れられそうな箱があった。

箱を開けると中には汚れた子供が眠っていた。

「……はあ、起きろガキ」

そう言うと子供が入っている箱を転がした。

その勢いもあってか、盛大に転がりながら中の子供は転がり出てきた。

「痛えな、何しやがる」

頭をぶつけたのか痛そうに押さえながら立ち上がる子供。

その子供に冷やかな視線を向けながら床に落ちていたナイフを拾うと手で遊び始めるレイズ。

「はい、良いですか。君は今海賊船（に偽装しているけど）に武器を所持して密航している訳なんです、そんな君はオレにナニされても文句が言えない、状況わかり？」

そういって意味もなく笑顔を子供に向けるレイズ。

それは決して子供に向けてはいけない大人が放つ妖艶さと絶対的捕食者の側面を併せ持った笑みだった。

真っ正面からその顔を見てしまった子供は処理が追い付かず気絶した。

「・・・クフフフ、シユライヤ早く起きろよ。お前の宝が向こうから来てくれたぞ」

その眩きは船底の静かさに消えていった。

「おーおーおーおー。なんかすごいことになってるけど皆大丈夫？」

船底の倉庫から密航した子供を空気圧で作り上げた風で触れないようにして持ち上げながら、両手に飲み物と軽食を乗せたお盆を持って甲板に現れたレイズが見たのは死屍累々に甲板に寝っ転がるエースたちだった。

「あ、あーあーあーあーあーあーあーレイズ、おま、お前何してたんだよ」

レイズを、というかその両手にある軽食と飲み物を見て多少元気になったエースがレイズに詰め寄る。

その後ろをいつもより回転速度が遅いベンサムが、その後ろを某○子さんのように這いずりながら近寄るサガ。

ロビンとカリーナはその場で座り込んで動く気配すらなかった。

「ワリイ、ワリイ。とりあえず食べられるなら食べて飲んで休んでよ。ここからはオレの能力で船進ませるから」

そう言うのと甲板に折り畳み机を広げ持ってきた軽食（ソフトボールほどの大きさのおにぎり 50 個）を置くとロビンとカリーナのもとに近寄る。



その後ろではエースが両手におにぎりを持って自分たちがいかに大変な思いをしてきたのかを熱弁している。

「二人は先にお風呂かな？もしよかったらこの子も一緒に入れてあげてよ」  
そう言うのと風で浮かせていた未だ気絶中の子供を二人の間に降ろす。

「別にいいけど、この子は誰よレイズ」

ワタシツカレテマス、カマツテクダサイイタワツテクダサイ。

そんな心の声が聞こえてきそうなカリーナの声に可笑しそうにクスリと笑いながら笑顔で爆弾を落とすレイズ。

「密航者」

レイズの発言から数秒甲板では一切の音が消えた。

「「密航者!?!」」

「あら、大胆な子ね」

ロビン以外の4人は驚きのあまり疲れを忘れて叫んでいる。

マイペースなロビンがレイズには可笑しく見えた。

「・・・・・・・・・・にいちちゃん、じいちゃん」

子供の声を聴けたのはレイズだけであった。

---

蛞蝓よりも話の進みが遅いですが、これからもよろしくお願いします。

# ONE PIECE-彼を王に-

---

著者 完全怠惰宣言

発行日 2020年2月15日

ハーメルン-SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/200599/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。

---